

第1章 多賀城市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

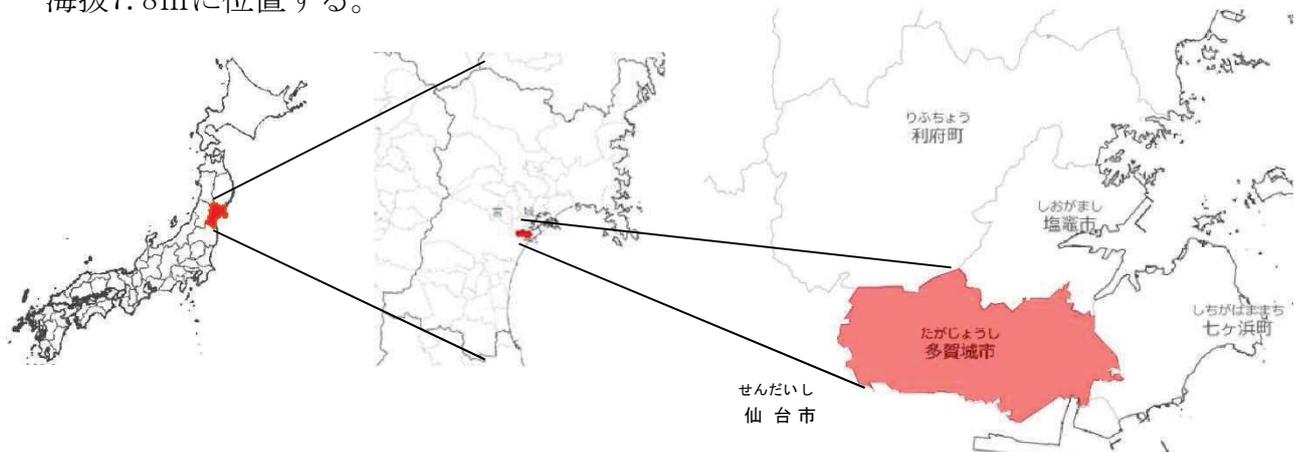
(1) 位置

本市は宮城県のほぼ中央、^{せんだいし}仙台市の中心部から北東約10kmの位置にある。

東西約7.8km、南北約4.2km、総面積は19.69km²であり、県内では隣接する七ヶ浜^{しちがはま}町、塩竈市^{しおがまし}に次いで3番目に面積が小さい。

市の北西は加瀬沼^{かせぬま}を隔てて利府町^{りふちよう}、北東は塩竈市、東は七ヶ浜町、西から南にかけては仙台市とそれぞれ接している。

なお、市域のおよそ中央にある市役所は、東経141度00分28秒、北緯38度17分27秒、海拔7.8mに位置する。



多賀城市の位置

(2) 地形・地質

本市の北西から南東にかけて、利府町の丘陵地帯を源流とする砂押川^{すなおしがわ}が流れており、地形は大きく二分されている。

砂押川の北は、松島丘陵と呼ばれる標高50m未満の低丘陵であり、南に向かって枝葉のように延びている。東北の政治・軍事の中心地であった多賀城は、松島丘陵の南西端、広大な仙台平野を一望できる位置に築かれている。

この場所は、仙台から塩竈・松島方面へ向かう塩竈街道が通じ、西から南にかけては古代において舟運に利用された七北田川^{ななきたがわ}及び砂押川が流れている。さらに、北東約2kmには国府津^{こうづ}と推定されている塩竈の港がひかえるなど、古くから陸上、水上交通の要衝の地であった。また、この丘陵上には、市内では最も古い中生代三疊紀^{ちゆうせいだいさんじょうき}の利府層があり、名勝興井（沖の石）^{おきのい}でその一部が奇岩として露出している。さらに、多賀城碑や多賀城跡の礎石もこの層の一部の花崗質砂岩^{かこうしつさがん}であることが判明している。

一方、南部から西部にかけては、県中央部の海岸線に沿って広がる沖積平野の北端に位置している。この沖積平野は一般的に仙台平野と呼ぶが、^{りくぜんきゅうりょう}陸前丘陵の間に形成された内陸の沖積平野も含めて仙台平野と呼ぶことがある。この沖積地上には、点在する五つの小丘陵があり、その一つが^{うたまくら}歌枕「^{うきしま}浮島」と考えられている。丘陵を海に浮かぶ島になぞらえたことから生じたものであることが容易に推察される。

なお、標高の最高値は、多賀城跡がある^{いちかわあざおおくぼ}市川字大久保の52.6mであり、最低値は^{さかえ}栄三丁目の0.8mである。市域の約50%は標高5m以下となっている。



多賀城市の地形

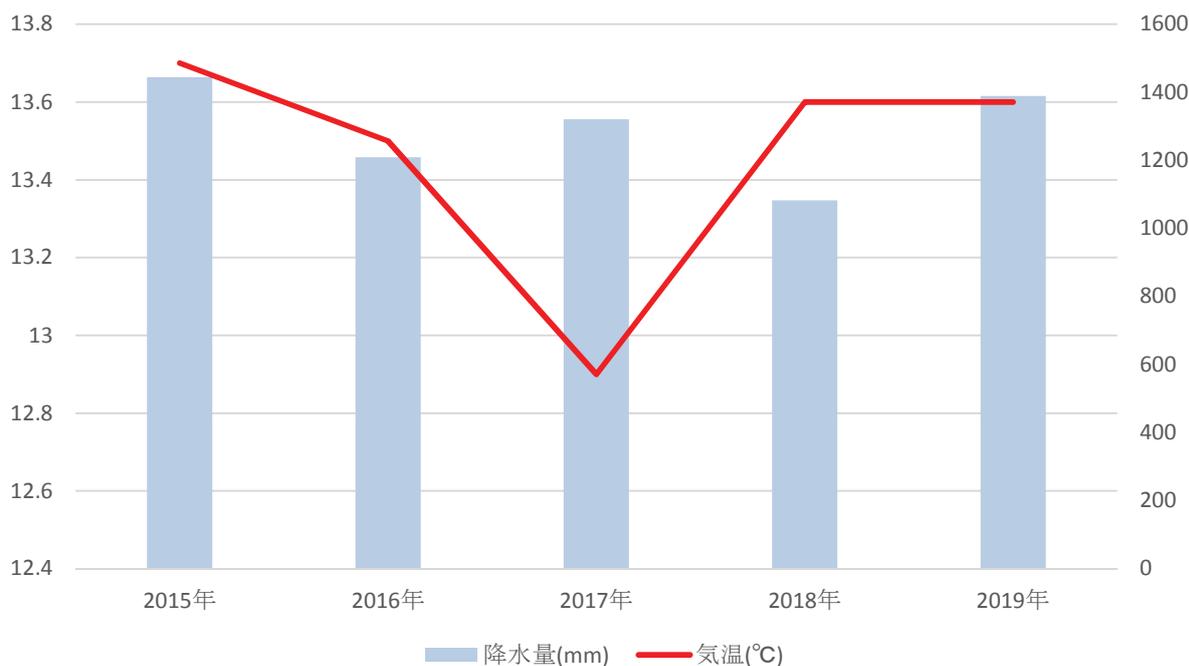


多賀城市周辺の地形

(3) 気象

太平洋に近い本市は、やませ（夏季に吹く冷たく湿った偏東風）の影響を受けやすく、また、降雪量の多い奥羽山脈から離れているため、夏は涼しく冬は降雪量が少ない。

過去5年間（平成27～令和元年）の気象データの平均をみると、気温13.5度、日照時間1,992.5時間（1日平均5.5時間）、湿度69.8%、降水量1,289.1mm（月平均107.4mm、最大日量303.5mm（令和元年））、最大瞬間風速毎秒30.1m、最深積雪は13.6cmであり、寒暖の差が少ない気候である。



過去5年間の降水量と気温の推移

2 社会的環境

(1) 市域の変遷

明治の初めには新田、山王、南宮、高橋、市川、浮島、高崎、留ヶ谷、田中、八幡、下馬、笠神、大代の13ヶ村であったが、明治22年（1889）に市制・町村制が施行されると、これら13ヶ村が合併し、多賀城村となった。

戦後、市町村合併促進策によって全国的に多くの市町村が合併し、自治体としての村名が激減した。しかし、本市は行政区域に大きな変更がないまま、昭和26年（1951）に町制、昭和46年（1971）に市制を施行して今日に至っている。



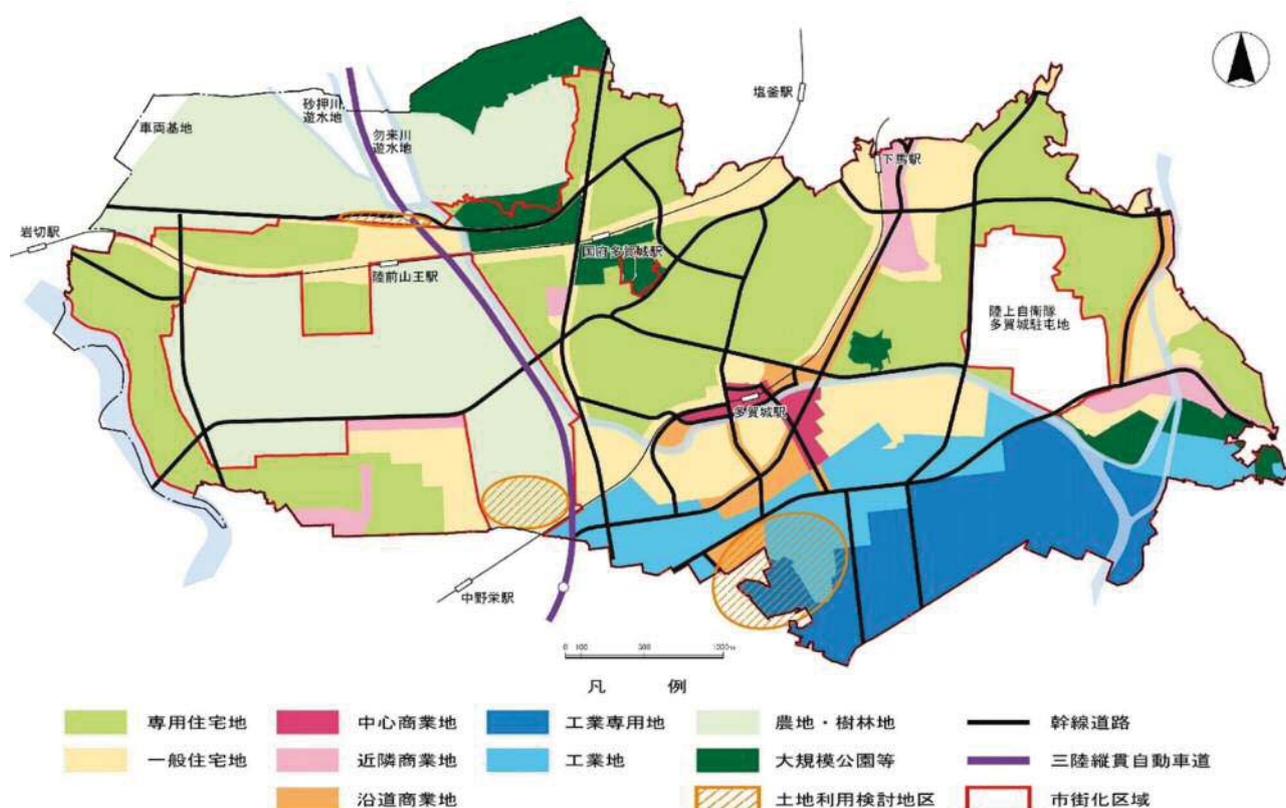
旧村の境界が描かれた御分領中郡村絵図（個人蔵）

(2) 土地利用

土地利用状況は、市域の全てが宮城県の仙塩広域都市計画区域^{せんえん}となっており、そのうち1,349.9haが市街化区域、619.1haが市街化調整区域となっている。用途地域の構成としては、住宅系が約47%、商業系が約4%、工業系が約18%であり、市街化調整区域が約31%となっている。

市域における用途の分布状況としては、農業地域は西部地区に広がり、国道45号と主要地方道仙塩釜線沿線には商業施設が集積し、工場地帯は海岸に近い市南東部の多賀城海軍工廠跡地^{こうしょう}一帯に形成されている。

平成28年（2016）には宮城県の施行によるJR仙石線多賀城地区の連続立体交差事業に関連して実施していた多賀城駅周辺を中心とする土地区画整理事業、市街地再開発事業等が完了し、中心市街地を備えた都市的土地利用が図られている。



土地利用図（多賀城市都市計画マスタープラン（平成25年））

土地利用状況の内訳

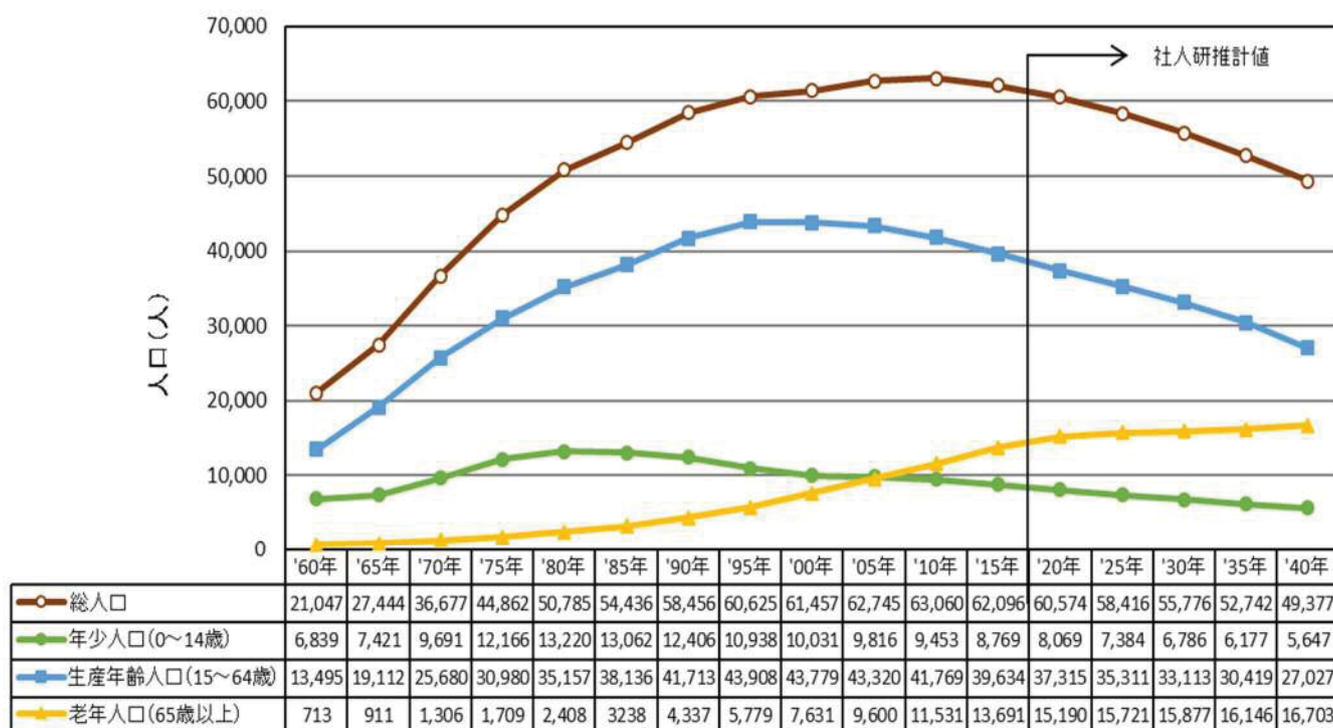
| | 全体 | 市街化区域 | 市街化調整区域 | | | |
|-----------------------|---------|---------|---------|------|-------|-------|
| | | | 住居系 | 商業系 | 工業系 | |
| 面積 (km ²) | 1,969.0 | 1,349.9 | 921.9 | 82.3 | 345.7 | 619.1 |
| 割合 (%) | 100 | 69 | 47 | 4 | 18 | 31 |

(3) 人口動態

本市は、隣接する仙台市が戦災復興と高度経済成長を経て劇的な人口増となったことを受け、昭和40年代以降、仙台市のベッドタウンとして人口が増加している。昭和50年代以降も宅地開発に伴い増加を続け、平成に入ってから微増傾向であったが、平成22年（2010）以降は減少傾向となっている。現在、市の面積19.69km²に人口62,245人、世帯数27,222世帯（令和2年3月末現在）が生活し、東北地方で第1位の人口密度3,148人/km²（令和2年3月末現在）となっている。

一方、高齢化率は24.6%（令和2年3月末現在）となっており、宮城県内平均の27.9%（令和2年3月末現在）よりも低い値となっているものの、年々増加してきている。

本市の人口は、平成22年（2010）にピークを迎えた後減少傾向にあり、今後も人口減少や少子高齢化の進んでいくことが予想される。



※データ：2015年までの数値は国勢調査（総人口には国勢調査時点での年齢不詳者を含む）、2020年以降の数値は国立社会保障・人口問題研究所（「社人研」）による平成30年推計値

人口の推移

(4) 交通機関

本市の道路網としては、市域の南東部に宮城県仙台市から太平洋沿岸部を隔て青森県青森市まで至る国道45号と、宮城県管理の主要地方道仙台・塩釜線が整備されている。また、高速道路体系としては、東北太平洋沿岸部一帯を縦断する三陸縦貫自動車道が整備され、平成28年（2016）には多賀城インターチェンジも開通している。

バス交通は、交通事業者と連携し、市の西部と東部にそれぞれバス運行を実施しているほか、本市と仙台市を繋ぐバスや塩竈市の「NEWしおなび100円バス」、七ヶ浜町の「町民バスぐるりんこ」が都市間を循環し、広域交通ネットワークの整備が進んでいる。

鉄道網としては、市域の北部に東京都から岩手県を結ぶJR東北本線が、中央部には宮城県仙台市と石巻市を結ぶJR仙石線が運行しており、本市の交通骨格網を集約形成し、日々の市民等の交通行動に寄与している。



多賀城市の交通網

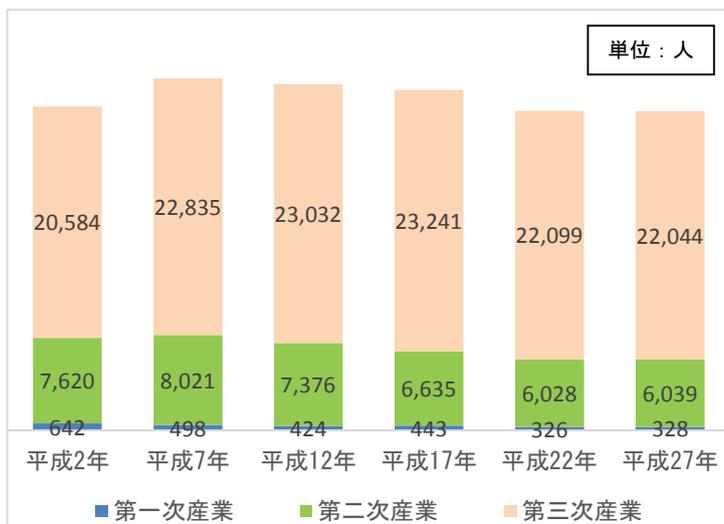
(5) 産業

本市は、昭和18年（1943）に多賀城海軍工廠^{こうしょう}が設置されて以降、市南東部の海岸に近い区域に工業地帯が形成されてきた。昭和37年（1962）には仙台湾地域が新産業都市建設促進法に基づく「新産業都市」指定により製造業を中心とする立地が促進され、現在は東日本大震災からの復興事業として市の西部に津波復興拠点を整備し、新たな視点から本市の基幹産業である製造業を支えている。

産業別の構成では、第一次産業が約1.1%、第二次産業が21.3%、第三次産業が77.6%となっており（平成27年度国勢調査）、第三次産業従事者が平成17年（2005）まで増加傾向、その後減少に転じている。一方、第一次産業のうち農業に関しては、西部の平野部一帯に水田が広がっているが、農家数、耕作面積ともに年々減少傾向にあることから、農地集約や生産性・競争性を向上させるため、大区画ほ場整備事業を実施している。

市内の総生産は、平成23年（2011）の東日本大震災で一旦落ち込み、平成26年（2014）で震災前の金額を超えたものの、平成27年（2015）以降、年々減少している（平成28年度宮城県市町村民経済計算）。

産業別の構造



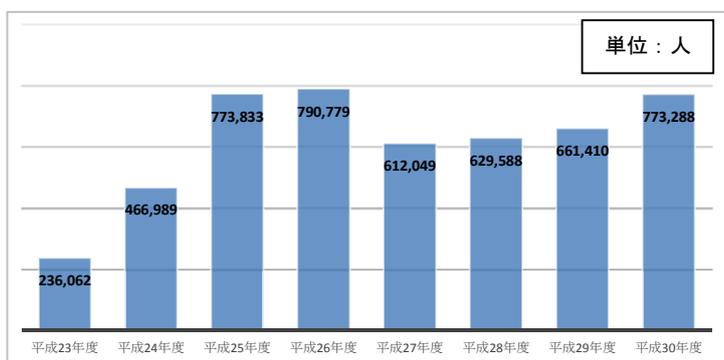
(6) 観光

本市は、多賀城跡附寺跡周辺にある多賀城碑や陸奥総社宮など歴史上価値の高い建造物等のほか、東北歴史博物館も国府多賀城駅に隣接しており、当該駅の徒歩圏内に観光集客を望むことができる状況となっている。本市の観光客入込数は年々増加傾向にあったが、昨今の新型コロナウイルス感染症の蔓延による来訪者等の低迷が見受けられ始めた。

今後、多賀城南門等の復

元にあわせ、新たな集客方法と経済への波及効果を考える必要がある。

観光客入込数の推移



3 歴史的環境

(1) 歴史

① 縄文時代

本市の歴史は縄文時代前期（今から約6,000年前）まで遡る。近隣の松島湾沿岸には大規模貝塚として全国的にも有名な里浜貝塚（東松島市）、西の浜貝塚（松島町）、大木 罎 貝塚（七ヶ浜町）などが分布し、他にも多数の貝塚や縄文遺跡が確認されている。沿岸部から若干内陸に位置する本市においても、海岸部に近い市東部には、縄文時代晩期の橋本 罎 貝塚、梶形 罎 貝塚、大代貝塚、大代遺跡、市北部の多賀城跡内には、縄文時代前・中期の五万崎遺跡、金堀貝塚といった縄文時代の遺跡がある。いずれも松島丘陵の縁辺部に位置し、本市でも広範囲にわたり人々の生活が営まれていたことを物語っている。

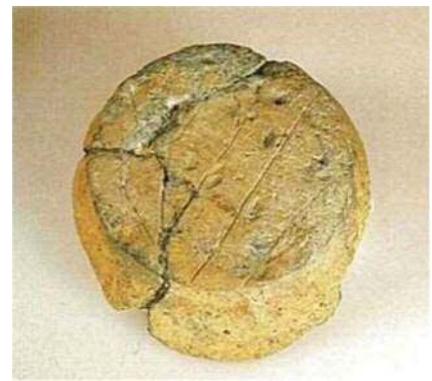


松島湾の俯瞰イメージ図
(イラスト：香川元太郎)
(監修：東北学院大学教授 松本秀明)

② 弥生時代

市内における弥生時代の代表的な遺跡としては、大代地区にある梶形罎貝塚が挙げられる。

この貝塚は、山内清男の「石器時代にも稲あり」（大正14年）という論文で全国に知られるようになった遺跡である。ここから出土した土器は、「梶形罎式」と命名され、東北地方南部の弥生式土器編年の標識資料として現在も利用されている。山内氏の論文に利用されたのは、稲粒の痕跡がある土器（右図参照）の破片で、これによって東北地方にも弥生文化が伝わり、稲作が行われていたことが明らかとなった。近年の調査成果では、山王遺跡や新田遺跡といった沖積地で弥生時代中期（今から約2,000年前）以前の水田跡や遺物包含層が発見されるなど、低地においても土地の利用が行われていたことが判明している。

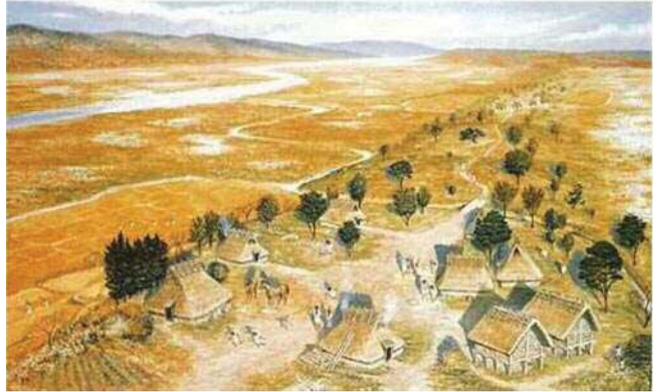


稲痕の付いた土器
(東京大学総合研究博物館蔵)

③ 古墳時代

市内の古墳としては、丸山^{まるやまがこい} 圀古墳群^{いなりでん}と稲荷殿古墳の2基が存在する。また、多賀城市西部の七北田川^{ななきた}や砂押川^{すなおし}によって形成された微高地上に立地する山王遺跡^{さんのう}では、古墳時代前期（今から約1,700年前）に集落ができ、その周囲にある新田^{にいだ}・市川橋遺跡^{いちかわばし}の低湿地部分では広大な水田が営まれていたことが判明している。

中期になると、東北地方において最も早く鉄器生産を始めた先進的な集落が形成されていたことが発掘調査により確認されている。さらに、北海道系の土器や石器が出土し、北方の人々と交流していたことも知られている。後期になっても、引き続き集落は営まれている。山王遺跡からは、数多くの生活道具とともに、仏具である柄香炉^{えこうろ}が出土していることから、早くから仏教文化が波及するなど、中央と密接に関わる集落であったことが判明している。



山王遺跡のムラ
(発掘調査成果を基に作成、市教育委員会)



木製柄香炉（東北歴史博物館蔵）

④ 多賀城の設置

承平年間（931～938）に作成された『和名類聚抄』^{わみょうるいじゆしやう}には、陸奥国^{むつくに}府は宮城郡にあったと記されており、市川の多賀城にあったことが明らかとなっている。

陸奥国の成立は7世紀後半のこととされているが、その頃の範囲は、福島県全域と宮城県の大崎地方^{おおさき}あたりまでであり、その北の地域はまだ律令政府に属さない「蝦夷の地」であった。仙台市宮城野区長町に所在する郡山遺跡では大規模な官衙が設けられ、7世紀末頃には陸奥国



多賀城跡（南上空より）

府が置かれたと考えられている。

奈良時代の初めに平城京が整備されると、時をおかずして全国の国府が整備されていくが、陸奥国内では養老4年（720）に蝦夷の大規模な反乱が起こり、按察使が殺害される事態となった。これを受け、国内の整備が行われ、8世紀のはじめ頃、仙台平野を望む松島丘陵の先端に多賀城が築かれ、郡山遺跡から国府機能が移転した。多賀城碑によると神亀元年（724）に大野東人に創建されたこと、天平宝字6年（762）に修造されたことが記されている。

多賀城の規模は約900m四方に及び、ほぼ中央には政庁が、城内6地区には実務官衙城が確認されている。多賀城には、陸奥国を治める国府が置かれ国司が派遣されるとともに、陸奥・出羽両国を統轄する按察使が常駐していた。また、東北地方北部の「蝦夷の地」を国内に取り込んでいく役割も担い、奈良時代には鎮守府も併せ置かれるなど、東北地方の政治・軍事の中心であった。

一方、多賀城の南東約1.5kmの地点には多賀城の造営と同時に、附属寺院も建立された。正式な寺名は伝わっていないが多賀城廢寺の西に位置する山王遺跡から、「観音寺」と書かれた仏教行事に使用された土器が出土しており、附属寺院の有力な寺名と考えられている。

⑤ 古代都市多賀城

宝亀11年（780）に起こった伊治公皆麻呂の乱後、多賀城南面では大規模な都市建設が開始される。多賀城南門に向かって延びる南北大路と、南門の約550m南に南辺築地と並行して延びる東西大路を建設するとともに、河川を改修し運河を整備するなど水陸両交通を兼ね備えた都市建設が始まった。

この南北・東西大路を基準として、道路による碁盤の目状に区画（方格地割）されたまち並みが段階的に整備され、9世紀中頃に完成したことが発掘調査により判明している。その範囲は東西約1,700m、南北約900mにおよび、南北道路13条、東西道路6条が確認されている。

都市の中には、多賀城に勤務した役人や兵士のほか、都市機能を支える多くの人が暮らしていた。発掘調査の成果から、都から赴任してきた上級官人は東西大路に面した区画に邸宅を構え、下級役人や庶民は大路から離れた区画に軒を並べて住んでいたことが明らかになっている。これに対して、南北大路沿いは私的な空間ではなく、大型の建物が建ち並ぶ公的な場であったことが判明している。

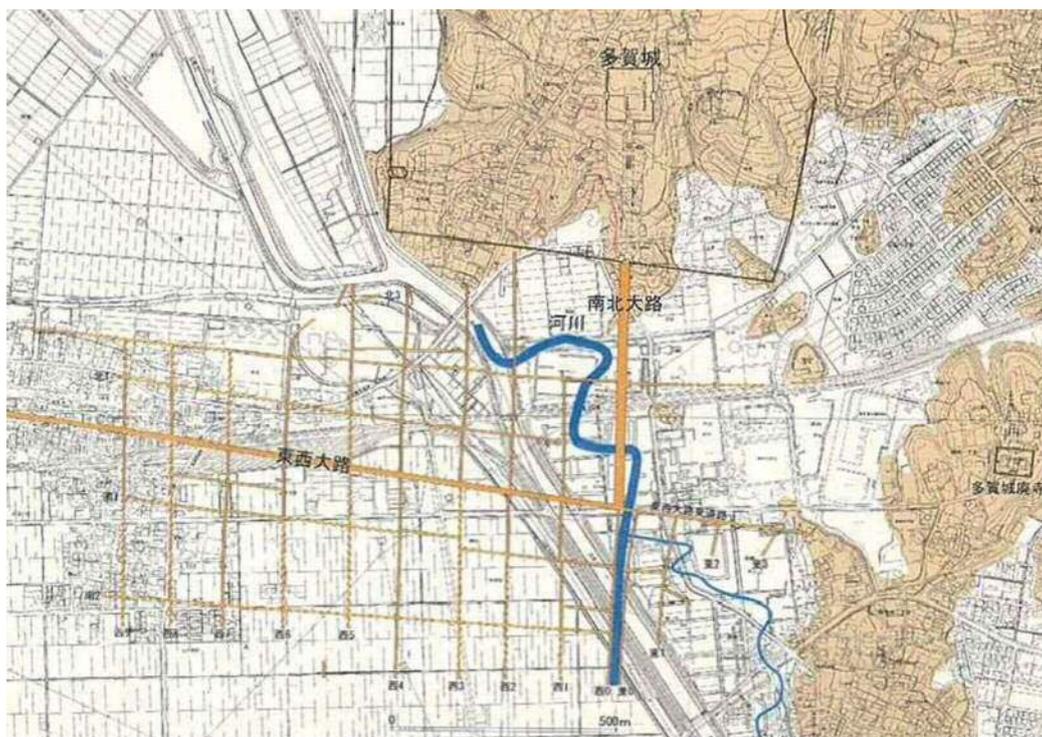
また、多賀城は古代東北の政治・経済の中枢であったため、大伴家持をはじめ高い教養をもった多くの官人が赴任した。平安時代、陸奥・出羽按察使に任命された源融が、塩竈の風景を模した庭園を平安京の自邸に造ったというエピソードからも知られるように、これらの官人たちは、多賀城で見たみちのくの風物を都に

伝えていったと考えられている。

最初の勅撰集として10世紀初めに成立した『古今和歌集』^{こきんわかしゅう}巻20の東歌^{あずまうた}には、「みちのくうた」が収められており、「すゑの松山」を詠み込んだ歌がみえる。この「みちのくうた」は当地で作られ、それが都に伝わり、勅撰集に選ばれることで、「末の松山」などがみちのくの歌枕として徐々に定着していった。



多賀城跡のまち並み（イラスト：早川和子）



多賀城外の方格地割（発掘調査成果より）

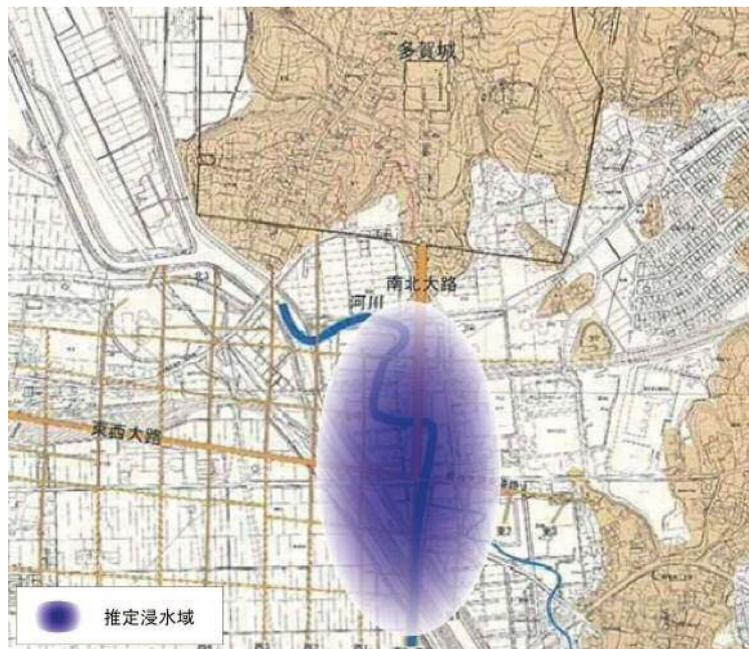
【貞観じょうがんの地震と復興】

貞観11年（869）5月26日、陸奥国で大地震が発生し、建物や城壁が崩れ落ち、城下まで津波が押し寄せ、人的・物的被害が甚大であったことが『日本三代実録』に記されている。この地震が東日本大震災と対比されることが多い貞観の地震である。津波が押し寄せた「城下」とは、古代地方都市というべきまち並みが発見されている山王・市川橋遺跡付近に相当するものと考えられている。東日本大震災で、この山王・市川橋遺跡の西を流れる砂押川においては、まさしく「城下」といえる古代のまち並みまで津波が到達しており、貞観の地震の大きさを物語るものと言えよう。

『日本三代実録』には、その後の復興に向けた様子も記されている。貞観11年（869）9月7日に、紀春枝という役人を陸奥国に派遣して地震の被害状況を調べさせ、同年10月13日には清和天皇が詔を発し、地震や津波の被害があった陸奥国に対し税を免除して、自活できない人々には食料を支給している。その後、神社などで人々の不安を取り除く祈願も実施されている。

さらに、大地震の翌年には「陸奥国修理府」が置かれるとともに、大宰府にいた新羅国しらぎの瓦職人を多賀城に派遣し、再建に伴う瓦づくりに従事させるとともに、その技を陸奥国の工人に伝習させていたことが読みとれる。これらのことを裏付けるように、多賀城跡の発掘調査では新羅国の特徴をもつ瓦が出土している。

津波が押し寄せた多賀城下においても、一時活動が停滞するものの、地震前と同じように道路によって区画されたまち並みが整備され、見事復興していたことが発掘調査の成果により判明している。



貞観の地震（9世紀後半）による津波浸水域（推定）

⑥ 中世

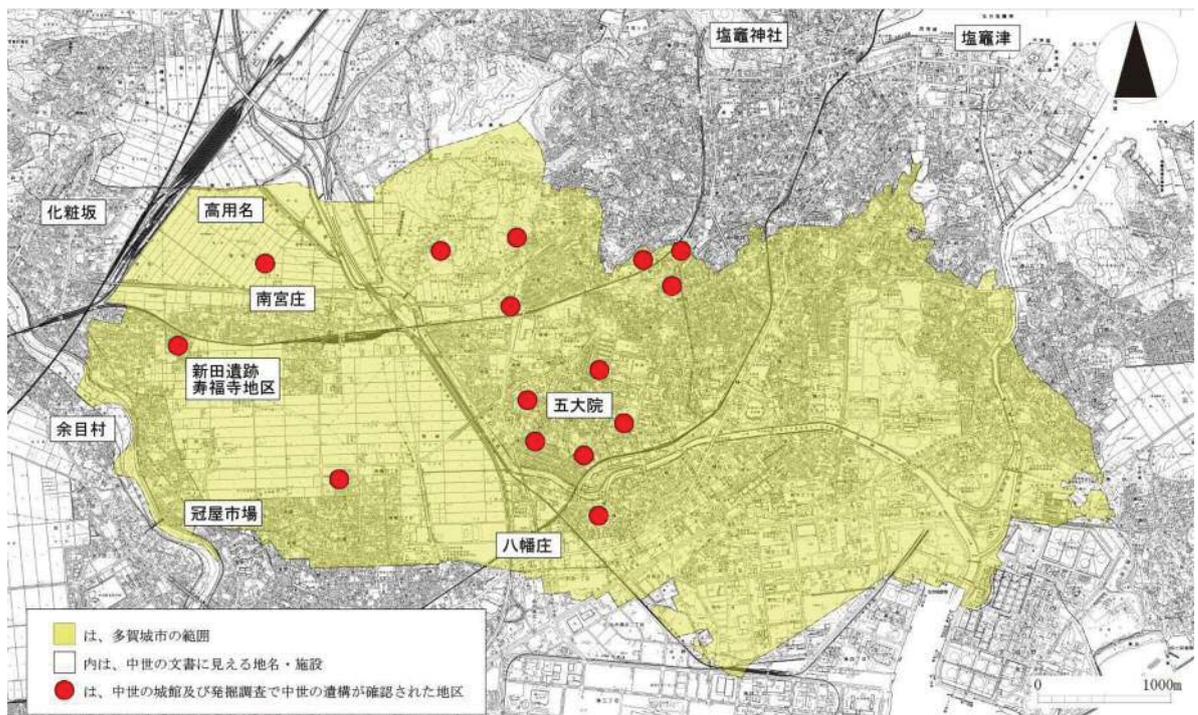
11世紀半ば、奥六郡（現在の岩手県中部～南部）に勢力を広げていた安倍氏が前九年合戦で滅亡し、その後出羽の豪族清原氏の内紛に端を発した後三年合戦が起こる。合戦収束後、清原氏の旧領を受け継いだ清衡は、実父の姓である藤原氏を名乗り、岩手県平泉町を本拠地とし、ここに奥州藤原氏による統治が始まる。

一方、陸奥国支配の拠点である国府も「多賀国府」の名で存在しており、そこでは、陸奥守の代官である目代が、留守所の長官＝留守職として在庁官人を指揮し、国務を執り行っていた。

文治5年（1189）源頼朝は、全国から動員した28万に及ぶ大軍をもって平泉に向かい、4代泰衡を攻め、奥州藤原氏は滅亡する。

同年10月、鎌倉への帰途、頼朝は多賀国府に立ち寄り、地頭たちを招集し、奥州統治の基本方針を示した。さらに府庁には「荘号の威勢をもって、不当な道理を押しすべからず。国中のことにおいては、秀衡・泰衡の先例にまかせて、その沙汰をすべし」という内容の張文を掲げた。ここに示された、平泉の先例を守るべしという基本姿勢は、その後長く鎌倉政権の方針として維持された。

建久元年（1190）、藤原泰衡の郎従であった大河兼任が鎌倉政権に対し反逆を企て、敗北するという事件が起こった。頼朝は、兼任に加担した留守所の長官に変



中世の多賀城の様子

わり、陸奥国留守職に伊沢家景^{いさわいえかげ}を任じ、陸奥国の民事・行政にあたらせた。家景は関白藤原道兼^{ふじわらのみちかね}の子孫といわれ、北条時政^{ほじょうときまさ}の推薦で頼朝の御家人となり、鎌倉政権の文官として採用された。伊沢氏はのち、職名にちなみ「留守^{るす}」姓を名乗るようになる。留守氏は「高用名^{こうゆうみょう}」と呼ばれる公領を管轄していた。国府周辺の村々からなる広大な領域は、まさに「国府用名^{こくふようみょう}」と言うべきものである。『留守家文書』には、「南宮村^{なんぐう}」「岩切村^{いわきり}」「高崎村^{たかさき}」など、高用名内の地名が記されており、これらは、現在の多賀城市西部から隣接する仙台市東部にかけての地名と同一のものと考えられていることから、一帯が留守氏の本拠地とみられている。多賀城市の西部にある新田・山王遺跡^{にいださんのお}では、12世紀から16世紀にかけて営まれた大規模な武士の屋敷群が発見されており、留守氏との関わりが推察されている。

多賀国府の所在地については、古代の多賀城と同じ場所に存在したという説や、七北田川流域の、仙台市東部、岩切から多賀城市西部にかけての地域を想定する説など、諸説がある。

鎌倉幕府崩壊後、後醍醐天皇^{ごだいごてんのう}による建武の新政がはじまる。元弘3年（1333）、北畠顕家^{きたばたけあきいえ}は陸奥守として、義良親王^{のりよししんのう}（のちの後村上天皇^{ごむらかみてんのう}）と共に多賀国府に赴き、奥羽の武士を支配することとなった。建武2年（1335）、鎌倉にいた足利尊氏^{あしかがたかうじ}が、後醍醐天皇に反旗を翻して京都へ進出したことから、鎮守府将軍に任ぜられた顕家は、義良親王を奉じ、留守氏^{るす}や八幡氏^{わた}といった奥州の武士団を引き連れて多賀国府を出発、京都を奪還し、尊氏を九州へ敗走させた。一方、顕家が不在の奥州では足利方が勢力を盛り返し、情勢が悪化する。顕家は急ぎ陸奥国府へ戻り勢力回復を図るが叶わず、延元2年（1337）に伊達氏^{いだて}を頼り、伊達郡^{いだてりょうぜん}霊山に移った。



南東より岩切城跡を望む
(仙台市教育委員会)

その後、南北朝双方による争奪戦の中、最終的に14世紀末、陸奥国では足利方の支配が確立し、多賀国府の名も歴史上姿を消す。

一方、宮城郡を治めていた留守氏は、観応2年（1351）の岩切城（仙台市宮城野区岩切所在）の合戦において壊滅的な敗北を喫するが、翌文和元年（1352）には所



伊達家紋三ッ引両漆器
出土状況（山王遺跡）

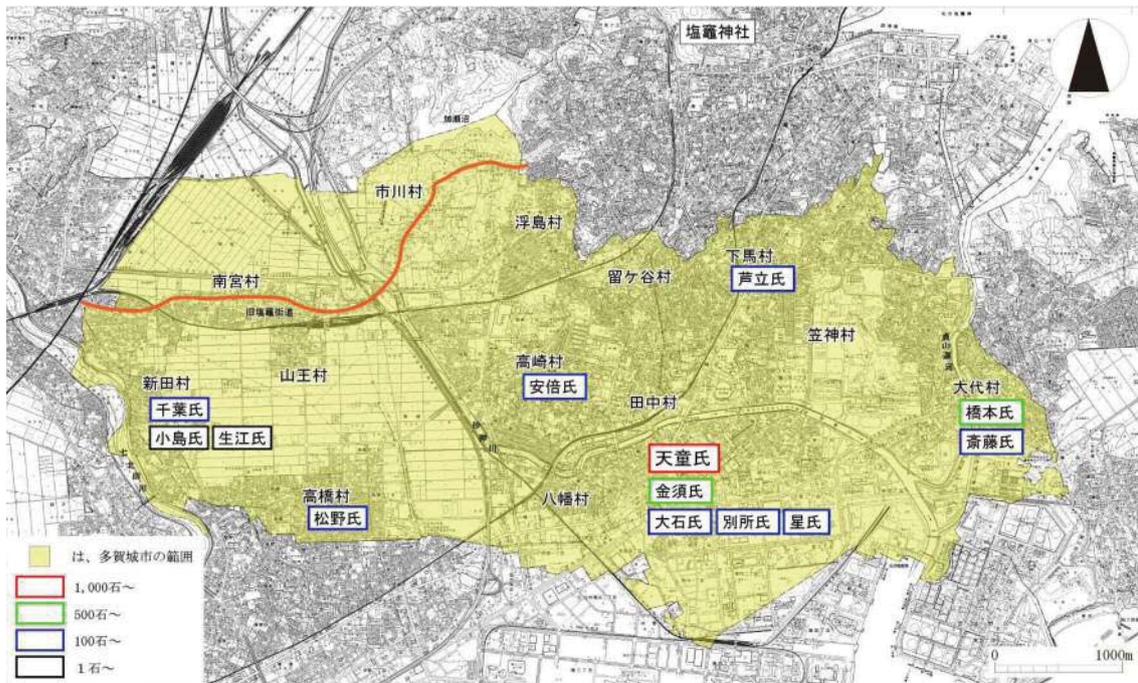
領を安堵され、以後奥州管領との関係性を深めてゆく。しかし、応永元年（1394）に一族の間で争いが起こると、この間に伊達氏の勢力が入り、伊達郡宗が留守14代当主を嗣ぐこととなった。以後、伊達系留守氏は伊達氏の勢力を背景に発展する。18代政景は伊達氏の武将として活躍し、何度か政宗の危機を救う働きをしたが、天正17年（1589）の所替えにより、宮城郡を去った。

⑦ 近世

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの後、陸奥国における伊達氏の所領が定まり、伊達政宗が仙台城の普請縄張り^{だてまさむね}と城下町の建設を始めた。

新たな陸奥20郡の領地は、旧領の半分にも満たない領地高で、野谷地や荒地が広大に広がる土地であった。こうした野谷地を開発することは、領内の経済を安定させる第一歩であり、さらにまた藩にとって、家臣に知行地^{ちぎょうち}を与える必要からも、耕地の拡大は必須のものであった。この野谷地開発の必要性和、家臣への知行地付与が結びついて、仙台藩では独特の開発事業が進められた。それは家臣の手による開発である。

仙台藩の制度において最大の特徴といわれるのが「地方知行制」^{じがたちぎょうせい}で、これは家臣に知行地として土地を与え、そこから入る年貢を家臣の収入とするものであった。藩は家臣に知行地を与える際、一部を本田畑で、残りを野谷地で与えたため、家臣は自ら野谷地を開発して耕地化し、知行高に加えていったのである。このよう



江戸時代の村と家臣の分布

に仙台藩では知行地を与えられた家臣団によって新田開発が進められていった。

慶長年間（1596～1615）、仙台北城下への水運や、野谷地開発のための排水を目的とし、阿武隈川と名取川の間あぶくまがわ なとりがわ こびきぼりに木曳堀が、次いで万治年間（1658～1660）には、多賀城市域を通る御舟入堀おふないりぼりが開削された。さらに北上川などの大規模改修もこの時期に実施されるなど、藩政時代の初期には野谷地開発に重要な役割を果たす様々な施策が実施されている。

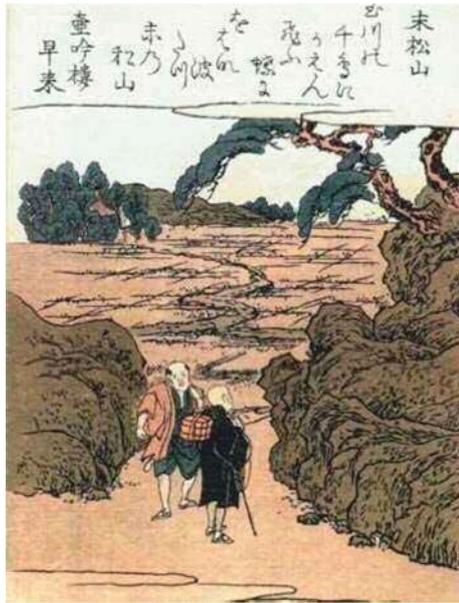
こうした開発に一つの区切りをつけたのが寛永17年（1640）から実施された仙台藩唯一の領内総検地で、この寛永検地をもとに仙台藩の村高をまとめた「正保郷帳しょうほうごうちょう」によれば、多賀城市域は耕地面積の85.8%が水田という、城下町近郊の典型的な水田地帯であった。その姿は近代まで変わることなく引き継がれていった。

この時代の本市域には13の村があった。それぞれの村には、藩の直轄地である蔵入地くらいりちと、相給知行あいきゆうちぎょうという、複数の家臣の知行地が存在しているのが一般的であった。

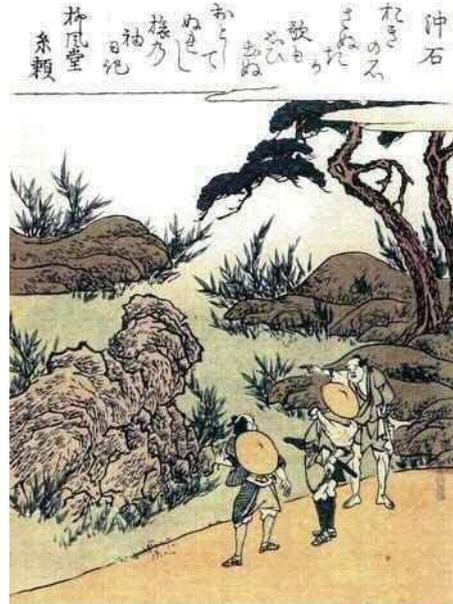
市域に知行地をもつ家臣のうち、在郷屋敷ざいごうやしきをもって居住していた家臣が13氏あり、その中の最大の家臣は八幡に在所拝領した仙台藩準一家天童氏てんどうであった（第2章 加瀬沼と天童氏（77ページ）参照）。天童氏はもと出羽国天童城の城主で、奥州管領斯波家兼しばいえかねの流れをくむ名門である。10代頼澄よりずみの時最上氏てんしょうと対立、天正12年（1584）に天童城が落城し、宮城郡西部を所領としていた国分氏こくぶんを頼って奥州に移り、のち伊達政宗に仕えた。

頼澄の子重頼しげよりが養嗣子として迎えたのが、一門涌谷伊達家の次男で、頼長よりながと名乗った。天童家の当主となった頼長は、多賀城跡の北に広がる加瀬沼を、灌漑用のため池として整備したといわれている。この頼長が後に寛文事件の中心人物となった伊達安芸宗重だてあきむねしげである。天童氏は八幡村に在郷屋敷を持ち、まわりに家臣団を住まわせていた。その様子は天和元年（1681）作成の屋敷絵図てんなに明らかであり、さらにこの絵図は、現在の八幡の町割りが江戸時代と大きく変わらないことを示している。

また、八幡には、末の松山、興井といった歌枕げんろくがある。元禄2年（1689）、「おくのほそ道」の旅で当地を訪れた松尾芭蕉まつおばしろうは、古来より歌に詠まれた歌枕と対面し、その感動を紀行文『おくのほそ道』に書き残している。本市には、これらをはじめ壺碑つぼのいしぶみや野田の玉川など、仙台藩4代藩主伊達綱村つなむらの時に整備された歌枕が数多く存在する。



末松山／奥州仙台名所尽集
(仙台市博物館蔵)



沖石／奥州仙台名所尽集
(仙台市博物館蔵)

「興井」の表記について

名勝「興井」は、歌枕では「おきの石（沖の石）」、「おきのゐ（沖の井・興の井）」、安永3年（1719）の『宮城郡八幡村風土記御用書出』には「奥井」と記されている。

本計画では、資料の出典にあわせて、「沖」・「興」・「奥」の表記を使い分ける。場所としての「おきのい（いし）」を表記する際には、名勝の指定を受けた「興井」に統一した。

⑧ 近代

明治政府による日本初の近代港湾建設事業である野蒜築港事業が始められると、宮城県は六大事業の一環として貞山運河ていざんうんがの全面的な改修を実施し、御舟入堀も大改修が行われた。明治17年（1884）、野蒜築港事業は台風の影響により頓挫するが、明治20年（1887）に貞山運河の全面的な改修が完了する。

このような情勢の中、明治18年（1885）日本鉄道会社は、奥州線（東北本線の前身）郡山こおりやま－仙台間の工事にあたり、中止となっていた野蒜－仙台－福島間の測量を、塩釜－仙台－福島間に変更して開始した。これは、失敗に終わった野蒜築港の代わりに、塩竈港が脚光を浴びたことによるものであった。

その後、仙台－福島間の鉄道工事は明治19年（1886）に「塩釜」から開始され、資材運搬線が仙台へ向けて建設されていった。これが宮城県最初の鉄道であり、後の塩釜線となった。

近代化の波は押し寄せつつあったが、明治になっても市内は江戸時代と変わらず、仙台近郊の農村地帯であった。壺碑も名所として広く親しまれており、正岡子

規や与謝野鉄幹など、著名な俳人・歌人が訪れたことが、紀行文に記されている。しかし、この様相を一変させたのが、第二次世界大戦時に設置された多賀城海軍工廠^{こうしょう}で、その範囲は市面積の4分の1に及ぶ広大なものであった。なお、海軍工廠の建設は、航空機用機銃とその弾薬を作ることを目的に、昭和17年（1942）7月1日から開始され、昭和18年（1943）10月1日に開庁した。

戦後は一時米軍の管理下に置かれたが、接收解除後は工場地帯や陸上自衛隊多賀城駐屯地として現在に至っている。駐屯地内には海軍工廠時の建物や土塁等の一部が現存している。



海軍工廠空撮
(昭和22年（1947）米軍撮影)



陸上自衛隊に残る海軍工廠施設
(窒化塩製造場)

⑨ 現代

江戸時代以降、農村地帯であった多賀城は、昭和17年（1942）の海軍工廠建設により、戦後大きくその様相を変えていく。

工業についてみると、昭和26年（1951）に、常時15人以上の職工を有する工場について、「土地、家屋、営業行為、又は収入に対して賦課する村税」の3カ年間免除の優遇措置を設け誘致を促し、昭和32年（1957）には課税標準額500万円以上、常時従事する工員50人以上に改め、工場の「固定資産税の減免に関する条例」を定め、工場拡張及び産業振興による雇用促進を図るなど、工業発展を見据えた政策を積極的に行っていた。

そのような中、昭和37年（1962）に新産業都市建設促進法が公布された。宮城県も多賀城町や仙台市、塩釜市など15市町村に対し、新産業都市区域の指定を受けるための同意を求め、昭和38年（1963）8月、多賀城町議会は異議なしとして可決した。昭和39年（1964）3月、多賀城町を含めた「仙台湾地区」が新産業都市の指定を受け臨海型工業の開発拠点として整備が開始されると、仙台湾に面する多賀城海軍工廠跡地等（仙台湾背後地）には多くの工場が誘致され、多賀城の工業は飛躍的に発展することとなった。

明治22年（1888）に村制を施行した多賀城は、昭和26年（1951）に町制、昭和46年（1971）には市制へと移行した。市域は多賀城村とおよそ同じであり、江戸時代の旧13カ村を踏襲している。

人口の変化に着目すると、町制直前の昭和25年（1950）に14,359人であった人口が、昭和35年（1960）に21,047人、市制直前の昭和45年（1970）には36,677人と、20年で2倍以上も増加している。その後は、経済が高度成長期（1955～1973）から安定成長期（1974～1984）に移行したことや、仙台港背後地における工業誘致が一段落したことなどにより、人口の増加は緩やかとなり、令和2年4月現在は62,245人となっている。

一方、昭和後半から令和にかけて、多くの災害に見舞われている。昭和53年（1978）の宮城県沖地震、昭和61年（1986）の8.5集中豪雨、平成6年（1994）の9.22集中豪雨、平成23年（2011）の東日本大震災、令和元年（2019）の令和元年台風第19号などは、市民生活を脅かし、市政運営にも大きな影響を与えた。

特に未曾有の災害となった平成23年3月11日の東日本大震災では、津波により市域の3分の1が被災し、多くの家屋が損壊するとともに、尊い命が失われた。この災害を教訓とし、大震災からの復旧、そして復興に向けた各種取組みが行われている。



東日本大震災津波直後の国道45号



令和2年(2020)現在の国道45号

(2) 関わりのある人物

① 大野東人（おののあずまひと）（?～742）

大野東人は、奈良時代前半に活躍した武人である。壬申の乱で活躍した大野果安の子として生まれ、武人であった果安の子らしく、和銅7年（714）、騎兵を率いて新羅の外交使節を出迎えたという記事で、初めて記録に登場する。

多賀城碑によれば、神亀元年（724）、東人により多賀城が築かれる。この年は海道（太平洋沿岸）の蝦夷が反乱し、陸奥国の官人が殺害されるという事件が起きている。直ちに藤原宇合を大將軍とする征討軍が派遣され、反乱の鎮圧に当たった。征討軍の中に東人の名は見えないが、後の征討に対す

武良士等及所委騎兵一百九十六人。鎮兵
麻柵發即日。到出羽國大室驛。出羽國守正
相待以三日。与將軍東人共入賊地。且開
十一日。將軍東人廻至多賀柵。自導新開通
出羽國最上郡玉野二十里。雖懸是山野形
八十里。地勢平坦。無有危嶮。狄俘等曰。從

続日本紀に記され
た東人と多賀柵

る叙勲の際にはその名が見えることから、征討軍の要職についていたようである。

天平9年（737）には按察使兼鎮守府将軍として東北地方の最高責任者であった東人は、多賀城を拠点に、雄勝村（秋田県）を攻略して城郭を築き、多賀城—出羽柵間の連絡路を開こうとしたが、想定外の大雪等により中断する。

その後、都に戻った東人は参議となり、天平12年（740）に九州で藤原広嗣（藤原宇合の子）の乱が起きると、大將軍として1万7千の兵士を率い乱の鎮圧に導いた。

② 百濟王 敬福 (697~766)

百濟王敬福は、かつて朝鮮半島にあった百濟国の王族の子孫にあたる人物で、文武天皇元年（697）百濟国最後の王のひ孫にあたる百濟王郎虞の子として生まれた。

敬福は、天平10年（738）陸奥介として記録に現れる。この時の陸奥守は、多賀城を創建し、鎮守府将軍の職も兼任していた大野東人であった。

天平21年（749）陸奥国小田郡（涌谷町黄金山神社周辺）で黄金が発見されたという知らせが都に届く。当時、聖武天皇は、東大寺の大仏建立を進めていたが、完成を目前にして大仏

に塗る黄金が不足していた。そのため、九百両の黄金が献上された時の天皇の喜びようは大きく、年号を天平から天平感宝に改めたほどであった。これにより陸奥守であった敬福は、位が7階級特進する異例の出世を遂げた。当時、越中国（富山県）に赴任していた万葉歌人として有名な大伴家持は

すめろきの 御世栄えむと 東なる 陸奥山に 金花咲く
と黄金発見を祝している。

その後、橘奈良麻呂の乱では反乱者を勾留し、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱では、仲麻呂によってたてられた淳仁天皇を幽閉する任に当たるなど政治の表舞台で活躍した。

③ 藤原朝獺 (?~764)

藤原朝獺は、多賀城を修造し多賀城碑に名を留めている人物で、奈良時代の半ば国の実権を握っていた藤原仲麻呂（恵美押勝）の四男として生まれた。

朝獺は、橘奈良麻呂の乱後の天平勝宝9年（757）、陸奥守として記録に登場す



百濟王敬福の名が見える漆紙文書
(山王遺跡出土)

る。その後、按察使兼鎮守将軍として、東北地方の全権を任された朝獺は、対蝦夷政策を積極的に進め、かつて大野東人が造営を意図しながら果たすことのできなかつた雄勝城（秋田県）造営を戦わずして成し遂げる。さらに、太平洋側においては、桃生城（石巻市）をつくり、蝦夷にとって重要な地点を奪った。



桃生城

(提供:宮城県多賀城跡調査研究所)

天平宝字4年（760）正月、これらの功績が認められ、2階級特進、同年9月、新羅国の使者が大宰府にやってくると、対蝦夷政策の手腕を評価され、使者と接見する

外交官に抜擢された。朝獺はそこで強硬な態度をとり、使者を追い返している。

その後、東海道節度使、仁部卿などの重要ポストを歴任し、天平宝字6年（762）12月1日、兄の真先、久須麻呂らとともに参議となり、親子四人が国政を動かす地位につくという異常な事態となる。

このような中、淳仁天皇を擁する仲麻呂、朝獺親子らに対抗するように、孝謙上皇が僧の道鏡を重んじはじめ、主導権をめぐる対立が表面化する。

天平宝字8年（764）9月、仲麻呂が反乱を企てていることが発覚、朝獺の兄、久須麻呂が陸奥国牡鹿郡出身の牡鹿嶋足に討たれ、朝獺は父仲麻呂らとともに平城京を脱出する。しかし、近江国高島郡（滋賀県高島市）に退き抵抗を試みるが敗れ、父仲麻呂とともに命を絶たれた。

朝獺が記録に見えるのはわずか8年間であるが、多賀城碑に刻まれた天平宝字6年（762）12月1日は、朝獺が参議に就任したまさに記念すべき日であり、父仲麻呂とともに国を動かした絶頂の時代であった。

④ 大伴家持 (718? ~ 785)

大伴家持は平城宮の東、佐保と呼ばれる地で生まれた。祖父の安麻呂、父の旅人はいずれも大納言という、名門の家柄である。天平17年（745）、従五位下の位を与えられた記事によって初めて記録に登場し、その後、越中国の長官や兵部省の次官などを歴任する。この頃中央では藤原仲麻呂が絶大な権力を握り、古来よりの氏族は力を失いつつあった。大伴氏も例外ではなく、家持にとっても不遇な時代が続く



大伴家持像(藤田美術館蔵)

が、^{ほうき}宝亀元年（770）、^{こうにんてんのう}光仁天皇の時代になり、中央政界に復帰する。

宝亀11年（780）、^{こればり}陸奥国上治（此治の誤記か）郡（栗原市）の長官であった伊^{これ}治^{はりのきみあざまろ}公^{これはりじょう}皆^{きのひろずみ}麻呂が、伊治城で按察使紀広純を殺害し、次いで多賀城を襲撃・放火するという大事件が起こり、陸奥国は混乱状態に陥る。この事態を收拾するため、^{えん}延^{りやく}暦元年（782）に按察使兼鎮守将軍、同3年（784）には持節征東将軍に任命され、蝦夷政策の全権を担って多賀城に赴任した。翌4年（785）4月には緊急事態に備え、^{たが}多賀・^{しなかみ}階上二郡を仮の郡から真郡にするよう政府に要請するなど、依然不安定な多賀城近辺の復興と整備に力を注ぐ。しかし、蝦夷に対しては積極的な制圧を行えないまま、同年8月28日に亡くなった。

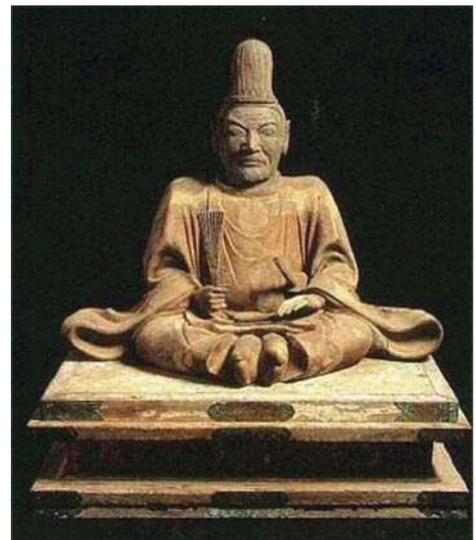
家持は官人である一方、万葉集に最も多くの歌を残した歌人であり、その編者でもある。名門大伴氏の長として軍事的・政治的に大きな功績を残せず、官位においても祖父や父に及ばなかった家持であるが、万葉集の成立に果たした役割は計り知れず、その名を不朽のものとしている。

⑤ ^{さかのうえのたむらまろ}坂上田村麻呂（758～811）

坂上田村麻呂は平安時代のはじめに活躍した武人で、その主な舞台は現在の宮城県北から岩手県にかけてであった。当時、多賀城が治める陸奥国の北には、中央政府の支配に入らない蝦夷の住む広大な地が広がり、その地を支配することは、政府の最大の目標だった。

支配を強化してきた政府に反発し、^{ほうき}宝亀5年（774）、蝦夷が桃生城（石巻市）を襲ったのをきっかけに、約40年にわたる戦乱の時代が続く。^{えんりやく}延暦10年（791）には10万という当時としては空前の規模の大軍が送り込まれ、田村麻呂は副将軍として初めて陸奥に足を踏み入れた。

その後、按察使・陸奥守・鎮守将軍の三官を兼任、さらに征夷大將軍に任命され、対蝦夷戦争における最高責任者となる。そして延暦20年（801）、胆沢の首長^{あて}阿弋^{るい}流^{もれ}為・母礼を降伏させ、長期にわたった戦争を事実上終結に導いた。



^{ひつじさき}坂上田村麻呂像（^{ひつじさき}雫羊崎神社蔵）

⑥ ^{みなもとのおる}源融（822～895）

源融は^{こうにん}弘仁13年（822）、^{さ が てんのう}嵯峨天皇の第八皇子として生まれた。^{じょうがん}貞観6年（864）3月、^{ちゅうなごん}中納言のまま、陸奥出羽按察使に任命され、その後^{だいなごん}大納言から左大臣へと昇

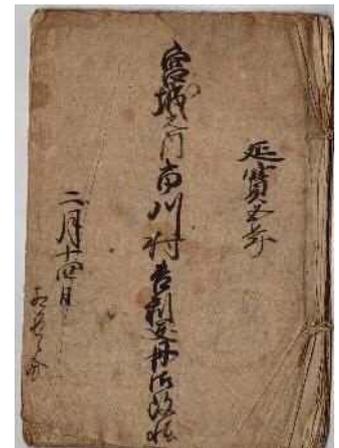
10世紀である。切先が僅かに欠損するものの、鞘に納まった状態で発見された。長さは短刀に相当し、刀身は鉄製で、茎は先端が尖っており、その先端附近に目釘穴が確認できる。柄頭は丸く、その縁には責金具が付けられている。鞘には腰に下げるための足金具（腹帯金）が2箇所につけられており、その内側に布目痕が残る漆膜が残存していたことから、鞘は布張りの上、黒色漆が塗られていたと推定される。

③ 古文書

古文書2件は、いずれも江戸時代のものである。

菊池家文書は、多賀城跡の所在する市川村において仙台藩の肝入を務めた家に伝えられたものである。市川村の村政にかかわるものが主であり、多賀城市域の近世前期の様子を知るうえで重要な資料である。

天童家文書は、仙台藩準一家（第2章 加瀬沼と天童氏（77ページ）参照）の家柄であった八幡の天童家に代々伝えられてきたもので、多賀城市域における仙台藩家臣としての天童氏と、その家臣団の様子を知ることでできる貴重な資料である。



菊池家文書
(市川村吉利支丹改帳)

(4) 遺跡ほか主な未指定文化財等

① 遺跡

本市は、仙台平野とその北の松島丘陵の境界に位置している。太平洋に面し松島湾からも近く、地理的な環境を背景に、古代には東北地方の政治・軍事の中心を担った多賀城が置かれた地である。そのため、市内には縄文時代から近世にかけての遺跡が広範囲にわた



市川橋遺跡から多賀城跡を望む（南から撮影）

って確認され、その面積は、多賀城跡を含めると、市域全体の28%にも及ぶ。このうち、多賀城跡南面には新田・山王・市川橋・高崎遺跡など古代多賀城に関連する大規模な遺跡群が立地している。

さらに、市内には古代多賀城に係わる地名である、「市川」（大字・河川名、国府に開かれた市付近を流れる川）、「作貫」（小字、国司の四等官「目」の転訛したもの）、「鴻ノ池」（伝承地名、国府の池の転訛）、「袖馬場」（小字、古代多

ウ 陸奥国戸籍関係漆紙文書

陸奥国戸籍関係漆紙文書は、八幡地区で発見したものである。漆紙文書とは、漆の乾燥を防ぐため、ふた紙として再利用された反故^{ほご}の文書が、漆に保護されることで腐らずに残ったものであり、全国で初めて多賀城跡から発見された。本資料は陸奥国の戸籍に関する漆紙文書3点で、年代は奈良時代のものである。内容は戸口損益帳^{ここうそんえきちやう}、計帳^{けいちやう}、計帳様文書^{けいちやうようもんじよ}であることが判明している。陸奥国の戸籍関係資料は、正倉院に伝わる和銅元年（708）の戸口損益帳断簡が2点あるのみであることから、本資料は断片ながら貴重な戸籍関係資料といえる。



陸奥国戸籍関係漆紙文書

エ 壺鐙^{つぼあぶみ}

鐙は馬具の一つであり、壺鐙は騎乗者の足を乗せる部分が袋状になっているものである。多賀城南面に碁盤目状に設けられた地割（方格地割）内を流れていた河川のうち、南北大路に架かる橋の下から出土した。鉄製のものであり、連結する兵庫鎖も含め黒色漆が施されている。年代は10世紀であり、類似する古代の壺鐙は、正倉院に伝世する奈良時代の資料が知られている。このことから、本資料は古代から中世に至る壺鐙の変遷を知る上でも貴重なものである。



鉄製の壺鐙

オ 横笛

横笛は、東西大路のうち南北大路との交差点から東側の地点（東西大路東道路）で発見された竹製の笛であり、表に吹口^{ふきぐち}（歌口^{うたぐち}）と指孔^{ゆびあな}6箇所が良好に残存している。出土した



横笛

層位から9世紀代のものと考えられている。9世紀の横笛の出土は全国的にも極めて少ないことから、当該資料は日本の古代音楽史を知るうえで重要である。

カ 刀

刀は、壺鐙と同じく南北大路上に架けられた橋の下から出土したもので、年代も同じく



刀

② 考古資料

考古資料は、古代多賀城に関連する遺跡からの出土資料である。「^{かんのんじ}観音寺」銘墨書土器・^{だいせんじく}題箋軸木簡・^{むつのかに}陸奥国戸籍関係漆紙文書は山王遺跡、^{つぼあぶみ}壺 鐙・横笛・刀は市川橋遺跡から出土したものである。両遺跡とも多賀城南面に位置しており、奈良・平安時代は一連の遺跡群と捉えられる。

ア 「観音寺」銘墨書土器

「観音寺」銘墨書土器は、多賀城南面に建設された古代のまち並みの幹線道路「東西大路」に面する区画から発見されたもので、10世紀前の^{はしきつき}土師器坏外面に墨書されている。多数の灯明具を含む約200点の土器と共に出土したことから、明かりを灯して祈る^{まんどうえ}万灯会のような仏教儀式に使用し、その後一括廃棄されたものと考えられる。多賀城下におけるこのような儀式は、多賀城の附属寺院である多賀城廃寺が主宰したと推測されることから、記録には残されていない多賀城廃寺の寺名を探る重要な資料である。



「観音寺」銘墨書土器

イ ^{だいせんじくもつかん}題箋軸木簡

題箋軸木簡は、東西大路に面した特別史跡山王遺跡千刈田地区で発見された。題箋軸とは、見出し（題箋）部分を外側に作り出した巻物の軸のことであり、本木簡はその題箋部である。10世紀前半頃の、多賀城政庁正殿に匹敵する^{しめんびさし}四面廂付建物の柱穴から出土し、表裏には「右大臣殿^{せんぼしゅうもん} 餞馬 収文」の文字が記されている。陸奥出羽国の広域行政官である按察使（大納言兼任）が右大臣昇進に伴い按察使の職を辞する際、餞別として陸奥国守から国産の駿馬が貢進されたことに対して、右大臣家から収文が送られてきたものと理解されている。



題箋軸木簡

この木簡は、当該区画が国守館である可能性を示唆しており、特別史跡追加指定の大きな要因の一つとなっている。

ち種子（仏像の姿を梵字で表したもの）が明らかなものは9基である。「キリーク」（阿弥陀如来）が5基、「アン」（普賢菩薩）が1基、「ア」（胎蔵界大日如来）が2基、「バン」（金剛界大日如来）が1基、不明1基である。建立年代は正徳元年（1288）～正和元年（1312）であり、旧暦の2・8月の建立がほとんどであること、銘文に「彼岸」と刻まれるものもあることから、彼岸供養として造立されたものであることが明らかである。

なお、彼岸供養については、日が没する方角を意識していたことが指摘されており、七北田川左岸の安楽寺付近で、西面して仏事を執り行ったものと推察される。

イ 伏石

伏石は、多賀城跡の範囲内である、市川字坂下に所在する。弘安11年（1287）の板碑であり、旧塩竈街道沿いで横倒しの状態で残っていることから、「伏石」と呼ばれている。種子は「アン」（普賢菩薩）、建立年月日は弘安10年（1287）8月8日である。

伏石には、「昔、この石を起こして立てたところ、この地に疫病が流行した。占ってみると石を起こしたためであるというので、再び元のように伏せた」という言い伝えがあり、現在も伏せた状態となっている。



伏石

ウ 弘安の碑

弘安の碑は高崎地区の化度寺境内に所在している。弘安7年（1284）の板碑であり、市内では最も古いものである。種子は法華経を守護する三十番神と、法華経を伝える人々を守護する十羅刹女の名が刻まれており、本来は経塚に建てられていた可能性が指摘されている。また、この碑はかつて、多賀城廃寺跡の西南500メートルの地に露頭



弘安の碑

していたものを掘り起こし、地元の人が鬼子母神堂の本尊として祀ったものと伝えられている。平成2年（1990）に焼失した鬼子母神堂の解体に伴い、平成6年（1994）に仙台市宮城野区蒲生に持ち出されていたが、平成12年（2000）2月に現在の化度寺境内に移設された。

(3) 市指定文化財

市指定文化財は11件あり、古文書2件、考古資料6件、史跡3件である。

| 種別 | 名称 | 管理者 | 指定年月日 | |
|-------|-------------|------------------|------------------|-------------------|
| 有形文化財 | | | | |
| 古文書 | 菊池家文書 | 多賀城市 | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| | 天童家文書 | | 平成 22 年 11 月 1 日 | |
| 考古資料 | 「観音寺」銘墨書土器 | | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| | 題箋軸木簡 | | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| | 陸奥国戸籍関係漆紙文書 | | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| | 壺鐙 | | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| | 横笛 | | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| | 刀 | | 平成 17 年 11 月 1 日 | |
| 記念物 | | | | |
| 史跡 | 南安楽寺古碑群 | | 多賀城市 | 昭和 48 年 12 月 18 日 |
| | 伏石 | | | 昭和 48 年 12 月 18 日 |
| | 弘安の碑 | 平成 13 年 11 月 1 日 | | |

① 史跡

史跡に指定している3件は、中世の供養碑である。

ア みなみあんらくじ 南安楽寺古碑群

南安楽寺古碑群は、市西端部の七北田川左岸にある。江戸時代に七北田川を新しく開削した際に、河川敷にあった板碑を安楽寺山門があったとされる「おかねだから」の地に集めたものとされている。

現在10基の板碑があり、このう



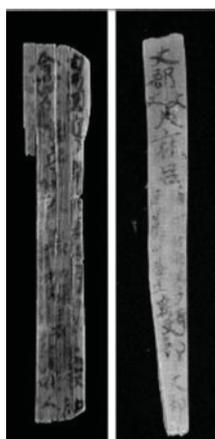
南安楽寺古碑群

南安楽寺古碑群の建立年月日等

| 建立年代 | 種子 | 備考 |
|-------------------|-----|-------|
| 正応元年 (1288) 10 月 | バン | |
| 正応 3 年 (1290) 2 月 | キーク | 「彼岸」銘 |
| 正応 3 年 (1290) 8 月 | キーク | |
| 永仁 5 年 (1297) 2 月 | キーク | |
| 永仁 6 年 (1298) 8 月 | キーク | 「彼岸」銘 |
| 延慶 3 年 (1310) 8 月 | ア | |
| 正和元年 (1312) 6 月 | キーク | |
| — | ア | |
| — | ア | |
| — | — | |

点)である。多賀城跡出土木簡には、多賀城の創建や変遷を示す資料をはじめ、荷札や物資の進上、兵士の移動など国府多賀城の政治・軍事の実態を知る貴重な内容が記録されている。

多賀城跡出土漆紙文書についても、8世紀末頃の国府の請求・貢進・田籍・計帳関係を示すものや具注歴などがあり、国府機能の一端を示す貴重な資料である。



多賀城跡出土木簡
(東北歴史博物館蔵)



多賀城跡出土漆紙文書
(東北歴史博物館蔵)

| 種別 | 名称 | 管理者 | 指定年月日 |
|---------|-----------------------------------|------------------|--------------------------|
| 有形文化財 | | | |
| 建造物 | 今野家住宅母屋及び中門 | 東北歴史博物館 | 平成4年10月27日 平成8年12月25日 |
| | 多賀城跡出土木簡(403点) 多賀城跡出土漆紙文書(92点) | 宮城県多賀城跡 調査研究所 | 平成26年2月25日 平成25年2月26日 |
| 考古資料 | 遮光器土偶 | 東北歴史博物館 | 平成10年12月4日 |
| | 顔面付き角製管 | | 平成10年12月4日 |
| | 角偶 | | 平成10年12月4日 |
| 民俗文化財 | | | |
| 有形民俗文化財 | カマ神(8体) | 東北歴史博物館 | 昭和60年5月24日 |

る。これら遺跡については、公有化を進めるとともに、計画的な復元整備等が進んでいる。また、昭和44年（1969）以降、宮城県多賀城跡調査研究所により継続的に発掘調査が行われており、多賀城の実態が徐々に解明されてきている。



多賀城廃寺跡（金堂から塔を臨む）
（昭和41年（1966）特別史跡指定）



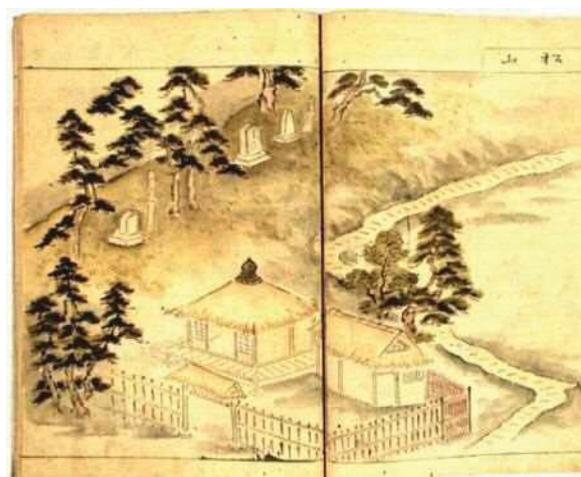
山王遺跡千刈田地区
（平成5年（1993）特別史跡追加指定）

③ 名勝地

名勝『おくのほそ道の風景地』として、「壺碑」^{つぼのいしぶみ}「興井」「末の松山」の3か所が指定されている。いずれも古代の歌枕の地として著名であり、平成26年（2014）に名勝として指定された。



壺碑／奥州仙台名所尽集
（仙台市博物館蔵）



末の松山／陸奥紀行
（東北大学附属図書館蔵）

(2) 県指定文化財

県指定文化財は7件（建造物1件、古文書2件、考古資料3件、有形民俗文化財1件）である。このうち、本市に関する指定文化財は古文書2件であり、本市内に所在する宮城県多賀城跡調査研究所の所蔵資料である。残る5件は本市以外の資料であり、東北歴史博物館所蔵のものである。

古文書2件は、多賀城跡出土木簡1件（403点）と、多賀城跡出土漆紙文書^{うるしがみもんじょ}1件（92

(1) 国指定文化財

国指定文化財は9件であり、有形文化財7件（重要文化財／工芸品1件、古文書1件、考古資料5件）、記念物2件（史跡1件、名勝1件）である。このうち、本市由来のものは古文書1件、史跡1件、名勝1件である。市所在の東北歴史博物館所蔵資料6件は、いずれも本市以外の資料である。

| 種別 | 名称 | 管理者 | 指定年月日 | |
|-------|---------------|------------|-------------|------------|
| 重要文化財 | 工芸品 | 白長覆輪太刀 | 東北歴史博物館 | 昭和14年5月27日 |
| | 古文書 | 多賀城碑 | 多賀城市 | 平成10年6月30日 |
| | 考古資料 | 埴輪武装男子半身像 | 東北歴史博物館 | 昭和15年5月3日 |
| | | 硬玉製有孔玉器 | | 昭和37年2月2日 |
| | | 硬玉製磨製石斧 | | 昭和48年6月6日 |
| | | 宮城県田柄貝塚出土品 | | 平成10年6月30日 |
| | | 宮城県里浜貝塚出土品 | | 平成12年6月27日 |
| 史跡 | 多賀城跡附寺跡(特別史跡) | 多賀城市 | 大正11年10月12日 | |
| 名勝 | おくのほそ道の風景地 | 多賀城市 | 平成26年10月6日 | |

① 古文書

古文書として指定されている多賀城碑は、多賀城の位置や創建年代、改修年代が記されており、^{りっこくし}六国史に記されていない多賀城の記録が刻まれている。江戸時代初めに発見され、歌枕「つぼの石ぶみ」として広まり、仙台藩により覆屋が設けられるなど保護されていたが、明治の真偽論争を経て偽作説が優勢となり、永く人々の関心が薄れていた。しかし、昭和38年（1963）から開始された多賀城跡の発掘調査や、碑そのものの再検討作業により、東北の古代・中世史を解明する上で極めて貴重な資料であることが確認され、平成10年（1998）に重要文化財に指定されている（第2章1-②参照）。



多賀城碑拓本

② 遺跡

多賀城跡附寺跡は、大正11年（1922）に史跡指定され、昭和41年（1966）に特別史跡に指定されている。当初は「多賀城跡」とその附属寺院である「多賀城廃寺跡」が指定されていたが、発掘調査の成果から国司館として「館前遺跡」、製鉄遺跡として「柏木遺跡」、国守館として「山王遺跡千刈田地区」が追加指定されてい

4 文化財等の分布状況

本市には、特別史跡^{た が じょうあとつけたりてらあと}多賀城跡 附 寺跡をはじめとする重要な文化財が所在しているほか、市の中央部から西部にかけては広範囲に周知の埋蔵文化財包蔵地が分布しており、その面積は市域全体の約28%に及んでいる。

また、古代から陸奥の歌枕として有名な名勝『おくのほそ道の風景地』である「末の^{すえ}松山」^{まつやま}「興井（沖の石）」^{おきのい おき いし}や、中世から近世に建立された供養碑なども各所に点在している。

指定文化財一覧

| 種 | 別 | 国 | 県 | 市 | 計 |
|-------|---------|---|---|----|----|
| 有形文化財 | 建造物 | | 1 | | 1 |
| | 工芸品 | 1 | | | 1 |
| | 古文書 | 1 | 2 | 2 | 5 |
| | 考古資料 | 5 | 3 | 6 | 14 |
| 民俗文化財 | 有形民俗文化財 | | 1 | | 1 |
| 記念物 | 遺跡 | 1 | | 3 | 4 |
| | 名勝地 | 1 | | | 1 |
| 計 | | 9 | 7 | 11 | 27 |

ら、多賀城碑が苔むした状態であることを聞き及んだ光圀は、仙台藩主伊達綱村^{だてつなむら}に対し、碑の覆屋を建ててはどうかという内容の書簡を送っている。これがきっかけとなり、現在みるような覆屋が造られたと考えられている。

⑫ ^{まつお ばしょう}松尾芭蕉 (1644~1694)

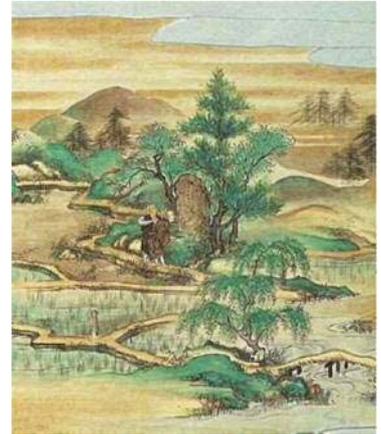
松尾芭蕉は、^{しょうほう}正保元年(1644)、^{いがくにうえの}伊賀国上野(三重県伊賀市)で6人兄弟の次男として生まれた。

^{げんろく}元禄2年(1689)、^{かわいそら}弟子の河合曾良を伴って、「おくのほそ道」の旅に出る。3月28日(旧暦)、江戸の深川を出発した芭蕉は、歴史に彩られた名所・旧跡・歌枕などをたずねながら、5月8日、多賀城に到着する。多賀城では^{つぼのいしづみ}壺碑、^{のだ}野田の^{たまがわ}玉川、^{おき}沖の^{いし}石、^{すえ}末の^{まつやま}松山を見て回り、壺碑を見た芭蕉は、「これまで見てきた歌枕や旧跡はかつての姿を失っているものが多かったが、この碑だけは昔のままであり、苦勞の多かった旅のことなども忘れ、涙が出るばかりだ」と感動している。また、末の松山においては、恋愛模様に歌われた末の松山と、その眼前にある墓地をみて、この世の無常を感じたことが『おくのほそ道』には記されている。

芭蕉は多賀城において句を詠んでいないが、壺碑の傍には、芭蕉が来たことを顕彰して、木ノ下薬師堂(仙台市)で詠まれた

あやめ草 足に^{むすば}結ん ^{わらじ}草鞋の緒

と刻まれた碑が地元の俳人たちによって建てられている。



壺碑を見る芭蕉と曾良
／芭蕉翁絵詞伝
(義仲寺蔵)

⑩ ^{きたばたけあきいえ}北畠顕家 (1318~1338)

北畠顕家は、南北朝時代、南朝の武将として活躍した人物で、『^{じんのうしやうとうき}神皇正統記』の著者として知られる北畠親房^{ちかふさ}の長男として^{ぶんぼう}文保2年(1318)に生まれた。

父親房が天皇の側近であったことから幼少の頃より着実に昇進し、^{げんこう}元弘元年(1331)、わずか14歳にして参議に昇任するという異例の出世を遂げる。

元弘3年(1333)鎌倉幕府が滅亡すると、^{ごだいごてん}後醍醐天皇による建武の新政の下、顕家は陸奥守に任ぜられ、後醍醐天皇の皇子である^{のりよし}義良親王(のちの後村上天皇)を奉じ、父親房らとともに陸奥国府へと赴き、東北地方の経営を始める。



北畠顕家像(霊山神社)

^{けんむ}建武2年(1335)鎮守府将軍に任ぜられると、足利尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻し京都へ進入したため、顕家は留守氏や八幡氏といった奥州の兵を引き連れ陸奥国を^に発ち、^{たよしただ}新田義貞、^{くすのきまさしげ}楠木正成らの軍と協力して京都を奪還、尊氏を九州へと敗走させた。

しかし、顕家が不在の奥州では、足利方が活発に活動を起こしていたため、陸奥国への帰還を余儀なくされる。

足利方の奥州総大将^{しばいえなが}斯波家長や^{そうましげたね}相馬重胤等を破り陸奥国府へ入るも、尊氏が勢力を盛り返すと、足利方の攻撃が激しくなり戦局は悪化、^{えんげん}延元2年(1337)に伊達氏を頼り、義良親王を奉じて伊達郡^{りやうぜん}霊山(福島県伊達市)へ移ったが、直後に後醍醐天皇から「奥州軍再出兵」を命じる勅書が届き、再び京都へ軍を進めた。

^{みのくに}延元3年(1338)、美濃国において足利方に勝利し、京都を目前にするが、決戦を避け、奈良などを中心に一進一退の攻防を繰り返す。しかし、^{いづみのくにいしづ}和泉国石津(大阪府堺市)で^{こうのもろなお}高師直の軍と戦い戦死、21歳という若さであった。

⑪ ^{とくがわみつくに}徳川光圀 (1628~1700)

徳川光圀は、^{かんえい}寛永5年(1628)、水戸城下にある水戸藩の家臣^{みきゆきつぐ}三木之次の屋敷で生まれた。

18歳の時、中国^{ぜんかん}前漢の時代に^{しばせん}司馬遷が著した『^{しき}史記』を読み、歴史書の重要性を認識し、これが『大日本史』編纂のきっかけとなった。また、文化財保護にも取り組み、藩内外の由緒ある神社仏閣について保護・復興に努め、仏像や古碑などの修理にも尽力している。

大日本史編纂にあたっての史料調査を行っていた^{まるやまかちょう}丸山可澄か



水戸光圀肖像画
(茨城県立歴史館蔵)

むつのくの おくゆかしくそ おもほゆる つぼのいしふみ そとのはまかせ
ふままうき もみじのにしき ちりしきて ひとまかよわぬ おもはくの橋

⑨ ^{みなもとのよりとも}源頼朝 (1147~1199)

源頼朝は、源義朝の三男として生まれたが、正室の子であったため源氏の跡継ぎとして育てられた。

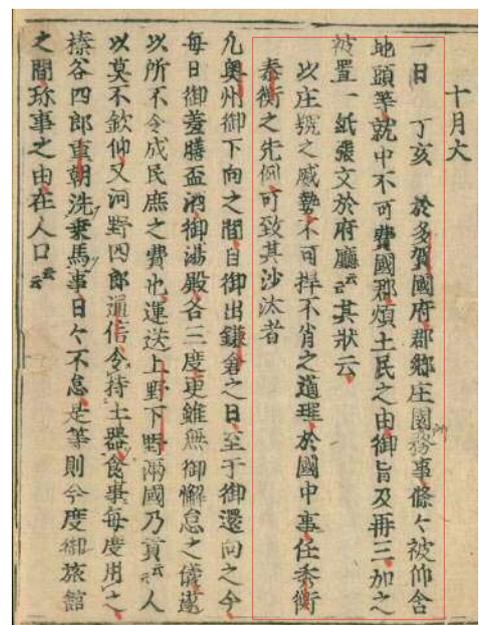
治承4年(1180)、^{もちひとおう}以仁王と^{よりまさ}源頼政が平氏打倒に立ち上がると、頼朝も^{ほうじょうときまさ}北条時政の援助を受けて挙兵する。しかし、石橋山の戦いで敗れ、一時^{あわのくに}安房国(千葉県)に逃れるが、平氏に対し不満を抱いていた東国武士が次々に頼朝のもとに参集し、祖父ゆかりの地である鎌倉に入る。これに対して平氏も直ちに討伐軍を向かわせ富士川で対峙したが、大きな兵力差に恐れた平氏はほとんど戦わずして敗走した。寿永2年(1183)、^{よしなか}源義仲(木曾義仲)が平氏を追って都に入ると、翌年義仲が^{ごしらかわ}後白河法皇を襲撃したため、源義経らを派遣して義仲を近江(滋賀県)において破り、^{ぶん}文治元年(1185)には平氏を壇ノ浦に追いつめ滅亡させた。

その後、平氏との戦いにおいてめざましい活躍をした義経を朝廷が頼朝の推挙なしに任官し、義経もこれを受けたことから^{あつれき}軋轢が生じ、頼朝は義経を討つ決意をした。義経もこれに応じ頼朝追討の宣旨を受けるが思うように兵が集まらず、義経は平泉の^{ふじわらのひでひら}藤原秀衡のもとに逃れる。文治5年(1189)、秀衡が亡くなると、その子^{やす}泰衡は頼朝の圧力に耐えきれず、ついに義経を自害へと追いやった。

頼朝は泰衡が義経をかくまっていたことを責め、自ら陣頭に立ち、全国の武士を大動員して奥州藤原氏を攻め滅ぼした。この戦いは、頼朝の先祖源頼義が活躍した前九年合戦の故実に基づいて行われ、頼朝はこの奥州合戦の際に、多賀国府にも立ち寄っている。また、鎌倉への帰路多賀国府において、陸奥国内のことについては、秀衡・泰衡の先例に従って取り扱うようにとの貼り紙を貼らせていたことが^{あずまかがみ}吾妻鏡に記されている。

『新古今和歌集』には、頼朝が詠んだ

みちのくの いはで忍ぶは えぞしらぬ
かきつくしてよ つぼのいしふみ
という歌が収められている。



吾妻鏡 文治五年十月一日
奥州征討後の陸奥国内の沙汰が記されている

強いられながらも、出羽（秋田・山形県）の豪族清原氏の応援によって安倍頼時・貞任父子を破った。義家は乱を平定した功績で出羽守に任ぜられ、父の死後、源氏の棟梁を継ぐ。

前九年合戦から21年後の永保3年（1083）、陸奥守として再び陸奥国にやってきた義家は、安倍氏に代わり勢力を伸ばした清原氏の内紛に介入する（後三年合戦）。この戦いで義家は清原清衡（後の藤原清衡）に加勢し、戦いに勝利する。しかし、この合戦は清原一族の内乱に介入した私戦にすぎないとみなされたため、朝廷からの恩賞は得られなかった。このため、義家は、苦しい戦いをしてきた東国の武士達に自分の財産をなげうって恩賞を与えたといわれている。

鎌倉幕府を開いた源頼朝、室町幕府を開いた足利尊氏の祖先にあたることから、武将の理想像として多くの伝説や逸話が生まれている。

⑧ 西行（1118～1190）

西行は俗名を佐藤義清といい、都にあって代々宮中警護などを務める家に生まれた。承平・天慶の乱で功績を挙げた藤原秀郷を祖先にもち、奥州藤原氏ともゆかりがあったとされている。

義清は保延元年（1135）、朝廷の親衛組織である兵衛府の官僚に任ぜられた後、上皇の御所の北面に控え、警護にあたる北面の武士として鳥羽上皇に仕え、さらに和歌、流鏑馬、蹴鞠などに多彩な才能を発揮した。ところが保延6年（1140）、23歳の若さで出家してしまう。動機は、『西行物語』に見える、親友の急死に遭い、無常を感じたという説が主流だが、『源平盛衰記』には、ある高貴な女性に対する失恋によるものとみえる。

出家後数年は嵯峨野や東山に草庵を結んで仏道に励むかたわら、諸国を巡り、数多くの優れた和歌を残した。

西行は生涯に2度、陸奥国を訪れている。最初は30代前後で、みちのくの歌枕に憧れ、藤原実方や能因の足跡を辿っての旅と考えられている。2度目は晩年、文治2年（1186）のことで、源平合戦の際、平重衡によって焼き討ちされた東大寺復興のため、奥州藤原氏に対して砂金の提供を依頼するという使命を担ってのことであった。

西行の歌集『山家集』には、みちのくゆかりの次の歌が収められており、西行と陸奥国とのかかわりを示している。

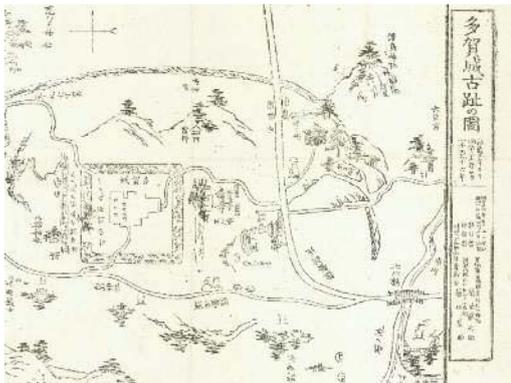


おもわくの橋

進していくが、^{ふじわらのもつね}藤原基経が融を超えて^{だいじょうだいじん}太政大臣に就任する。さらに^{がんぎょう}元慶8年(884)、^{ようぜいてんのう}陽成天皇が廃位した時に皇位継承を望んだものの、基経に退けられるなど、政治的にはままならないことも多かった。

一方、文化人としての名声は高く、鴨川のほとりに「^{かわらいん}河原院」と呼ばれた広大な邸宅を構え、陸奥国の塩竈の風景を模した庭を造った。そこにはみちのくの歌枕のひとつ、「^{まがきのしま}籬ノ島」もあり、さらには難波から海水を運ばせて藻塩を焼かせるなど、風流かつ贅沢極まりない生活をしたと伝えられている。

こうした風流ぶりや河原院をめぐる逸話は、その後の文学作品にも取り上げられ、能「融」のモチーフともなった。また、みちのくの風景を愛でた融の伝説は、地元にも根付いている。通称「^{おとどのみや}大臣宮」と呼ばれる小高い台地がJR東北本線^{たかひら}高平踏切の南東にあり、かつてこの上には「大臣宮」と刻まれた石柱が立っていた。現在その台地は失われてしまったが、石柱は線路南に安置されている。それ以前には石の^{ほくら}祠が祀られていたといわれ、これは現在、浮島神社に合祀されている。この「大臣」こそ、左大臣源融ではないかとの言い伝えが江戸時代の記録に残っている。



多賀城古址図(個人所蔵)
明治22年の絵図に描かれた大臣宮



石の祠(浮嶋神社に合祀)

⑦ ^{みなものよしえ}源義家 (1039~1106)

源義家は、^{ぜんくねん}前九年合戦で活躍した源頼義の^{よりよし}嫡子として^{ちょうりやく}長暦3年(1039)に生まれた。石清^{いwash}水八幡宮(京都府)で元服したことから、^{はちまん}八幡^{たろう}太郎とも呼ばれた。

義家が歴史の表舞台に出てくるのは、^{えいしょう}永承6年(1051)、陸奥国で起きた安倍氏の反乱を鎮めるため父頼義に従って出陣した前九年合戦からである。この戦いで頼義・義家父子は苦戦を



前九年合戦繪巻
(国立歴史民俗博物館蔵)

賀城の馬場に因む)、「塔の越原」(多賀城の附属寺院の塔跡に因む)、「御座の間の跡」(現政庁正殿跡)、「大臣宮」(源融を祀る石の祠のあった場所)などがあり、地域住民の生活の中で古代多賀城の存在が意識されてきた様子が伺える。

② 歌枕

歌枕については、名勝『おくのほそ道の風景地』である「壺碑」^{つぼのいしぶみ}、「末の松山」^{おきのい}、「興井(沖の石)」のほかに、「浮島」^{うきしま}「おもわくの橋」^ち「千(志)引石」^{ひきいし}「野田の玉川」^{たまがわ}といった都人が憧れたみちのくの歌枕と考えられている地も多く存在する。



千(志)引石

③ その他の有形文化財

一方、市内には古代多賀城と関連するもの以外にも、中世以降の信仰を示す石碑が残っており、その数は500基を越える。八幡地区では、都市化した中でも江戸時代に天童氏^{てんどう}がつくった絵図に見えるまち割りが残っている。

また、仙台から塩竈へ通じる塩竈街道沿いの南宮、市川といった集落には、江戸時代から大正にかけての板倉が多く残っている。

近代以降の文化財としては、明治期に改修された貞山運河、明治20年(1887)に開通した県で最も古い鉄道遺構である旧塩釜線玉川橋梁などがある。また、第二次世界大戦時に多賀城海軍工廠^{こうしょう}が建設されたため、市南東部の工場地帯や陸上自衛隊多賀城駐屯地内には、多賀城海軍工廠の建物や土塁などが現在も残っている。

さらに、塩竈街道沿いには明治9年(1876)に東京―塩竈間の水準測量が行われた際の「高低几号標」^{こうていきごうひょう}があり、測量当時から原位置を留めるものとして貴重である。



旧塩釜線玉川橋梁



高低几号標

④ 無形の民俗文化財

ア 多賀城鹿踊^{たがじょうししおどり}

無形の民俗文化財としては、多賀城鹿踊がある。かつて八幡中谷地地区に「鹿踊」の一座があり、鎮守八幡社の4月17日の例祭には境内で演じていた。しかし、第二次世界大戦時の海軍工廠建設などにより踊り手が分散し廃れてしまい、その当時のものを明確に伝えている写真や道具類が皆無に等しい状態であった。昭和54年（1979）、鹿踊復活準備委員会のメンバーの記憶だけを頼りに「多賀城鹿踊」として復活し、現在も多賀城跡あやめまつりや、万葉まつりなどで披露されている。



多賀城鹿踊

イ どんと祭

年中行事としては、正月飾りや神札等を焼納する1月14日の「どんと祭」が現在も盛大に行われている。市内におけるどんと祭は、もともと屋敷内で松を納める（松飾りを燃やす）行事であった。現在では集落の神社ごとに正月飾りを燃やし、その火にあたることで無病息災を祈る行事として定着している。



どんと祭(陸奥総社宮)

(5) 日本遺産

平成28年（2016）には、特別史跡多賀城跡附寺跡、重要文化財多賀城碑、名勝「おくのはそ道の風景地」の「壺碑」・「興井」・「末の松山」が日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財として認定されている。

日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の認定ストーリーは、仙台藩を築いた伊達政宗が、古代以来東北の地に根付いてきた文化の再興・再生を目指す中で、伊達家で育まれた伝統的な文化を土台に、上方の桃山文化の影響や政宗の個性、さらには海外の文化に触発された国際性等を取り入れながら、新たな“伊達”な文

日本遺産構成文化財

| 番号 | 名称及び写真 | ストーリーの説明 | 種別 |
|----|--|--|-----|
| ① | <p>多賀城跡附寺跡</p>  | <p>古代律令国家が造営した陸奥国府。8世紀初めから11世紀中頃までの約350にわたり、東北の政治・文化の中心として機能した。</p> <p>平安時代に都の貴族たちは、この地を「みちのく」の名で呼び、国府の官人とどまらず、幾人もの歌人が憧れも込めて歌を詠んでいる。</p> | 遺跡 |
| ② | <p>多賀城碑</p>  | <p>陸奥国府多賀城の修造を記念した奈良時代の石碑。碑文には多賀城の位置や、神亀元年（724）に創建され天平宝字6年（762）に修造されたことが記されている。</p> <p>永く土中に埋もれていたが、江戸時代に仙台藩2代藩主忠宗の頃に発見された。水戸藩徳川光圀の助言もあり、4代綱村が覆屋を建て保護した。</p> | 古文書 |
| ③ | <p>おくのほそ道の風景地 壺碑（つぼの石ぶみ）</p>  | <p>古くは、西行をはじめとする文人墨客に詠まれた歌枕ゆかりの地。</p> <p>この地を訪れた芭蕉は、かつて陸奥国の中心として栄華を誇っていた古代多賀城の由緒が刻まれ、昔から変わらぬ姿で佇んでいる壺碑を見て、涙がこぼれそうになるくらい感動した。</p> | 名勝 |
| ④ | <p>おくのほそ道の風景地 興井</p>  | <p>二条院讃岐や小野小町の和歌で知られた歌枕ゆかりの地。仙台藩による名所整備の折には、地元肝入が「奥井守」に命ぜられ、手厚く保護された。</p> <p>芭蕉とともにこの地を訪れた曾良は、興井が旧八幡村の屋敷の裏にあったことを旅日記に記している。</p> | 名勝 |
| ⑤ | <p>おくのほそ道の風景地 末の松山</p>  | <p>古くから愛の誓いの象徴として多くの歌に詠まれてきた、みちのくでも名の知れた歌枕ゆかりの地。</p> <p>芭蕉は、丘の上にそびえる松の合間に墓が並ぶ光景を見て、永遠の愛を約束した男女の契りも、結局は墓の下に帰ってしまうものかと悲しさを募らせた。</p> | 名勝 |

化を仙台の地に華開かせ、政宗以降も仙台藩にとどまらず、庶民層に至るまで広く定着し熟成していくというものである。

この伊達な文化の一つの核となる「古代以来東北の地に根付いてきた文化」の中心が、古代国府が置かれた多賀城であり、仙台藩による歌枕の地の再発見と整備、保護により、壺碑や末の松山、興井などといった歌枕の地が今日まで良好な状態で残されている。

(6) 特産品等

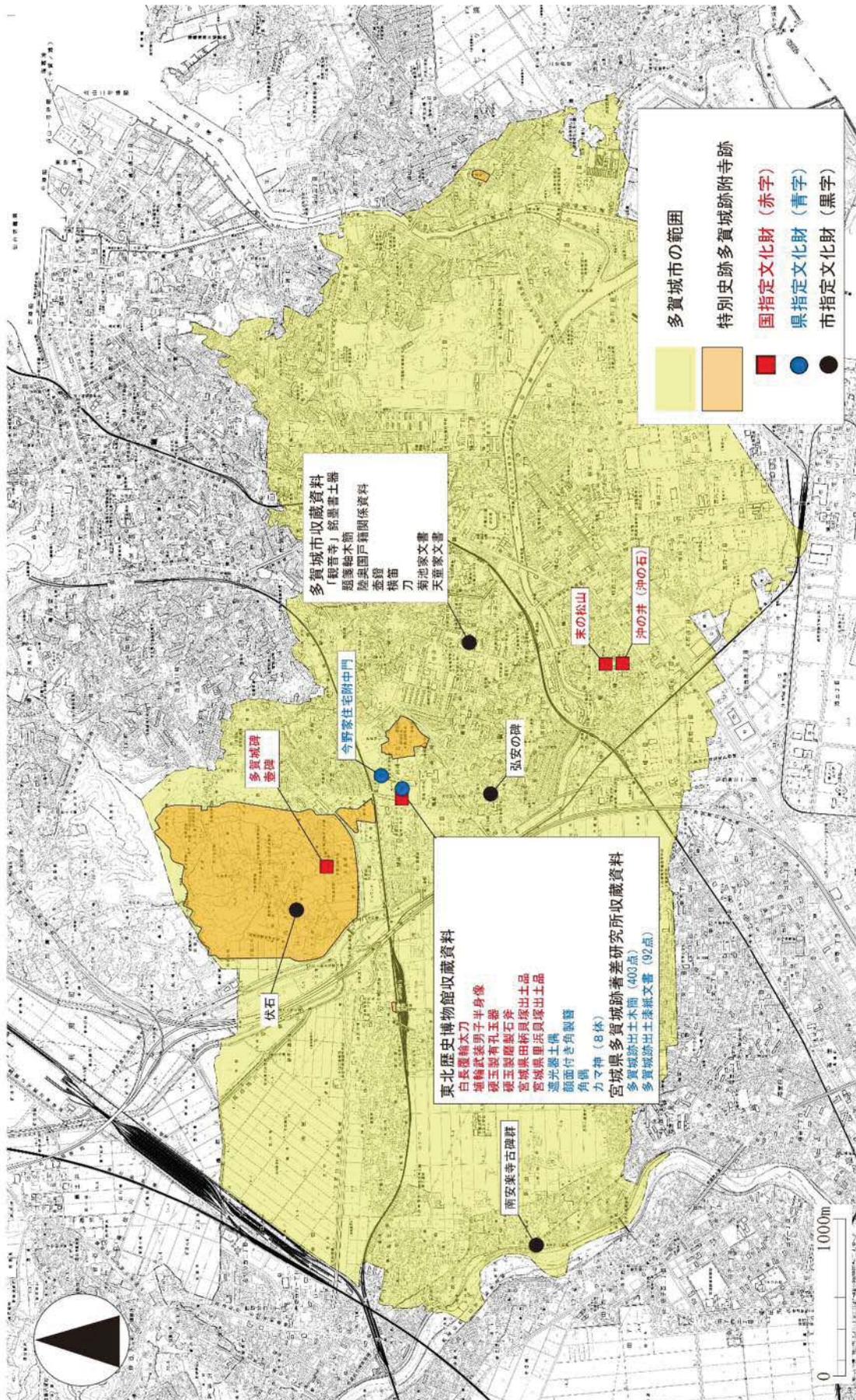
多賀城は、奈良・平安時代に国府が置かれ、平安時代には国府南側一帯にまち並みが形成されていたことが明らかとなっているが、近年、そのまち並みの外側に畑や水田などの生産域が広域に展開していたことが判明した。弥生時代の水田経営に始まり、中世の南宮庄や近世初頭の八幡・田中村での新田開発など、多賀城は古くから米とともに歩んできた歴史がある。

このような背景から、本市では20年以上前から古代米の作付けを行っていた。現在、作付けしている古代米は、紫黒米うるち品種「おくのむらさき」、紫黒米もち品種「あさむらさき」、「関東黒もち208号」、「緑米アクネモチ」の4種類である。収穫した古代米は、作付け当初は酒米としてのみ用いられていたが、近年は積極的な製品開発を行い、古代米そのものをはじめ、蕎麦や洋菓子、中華料理など、多くの食材として商品化している。

そして、古代米を使用した一品一品を、多賀城の「城」、古代米の色の「紫」にちなんだ新たな食ブランド“しろのむらさき”として、さらに多様な展開を図っている。



グルメブランド“しろのむらさき”



指定文化財の分布